
幸せを求めて

コーベ－コーベ－

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せを求めて

【Nコード】

N6522D

【作者名】

コーベークーベークー

【あらすじ】

美優は母と弟の3人暮らし。母は持病があり家庭の収入は美優のバイト代だけだった。けれど美優の収入では母の治療費、食費と生活は難しくなり、美優は夜の仕事へと手を出していく。純粋な少女が生きるために抗って戦いながら生きていく。美優に幸せな日々は待っているのか。

幸せだった日々

美優の母親は美優が生まれた頃から病氣を持っていた。病名は関節リウマチ。すぐにどうこうなる病氣ではないが進行性で徐々に体は思うように動かなくなり、心身共に辛いものだった。

そして関節リウマチ特有の朝のこわばり（関節の激痛）の症状は母親を苦しめるものだった。

それでも母親のわずかながらの給料と保険金、そして美優と弟のバイト代でどうにか日々生活することが出来ていた。美優の家には父親がいない。父親は母親のお腹に弟がいることを知ったときに、他の女を好きになり私達を捨てた。

その時母親はどうにかして私達を食べさせていくために父親にすがりついた。

「待つてあなた。私達やり直せないかしら、私頑張るから。私も毎日働くし」

「智華（母親の名）…もう無理なんだ。」父は母の言葉を止めた。

「あなたが彼女を愛しているならそれでも良いの。でもあなたの子供は関係ないはずよ。お願いだから美優と生まれてくる子だけでも愛してあげて。」

母は涙を流しながら父に頭を下げた。

「智華、ごめん。もう無理なんだ。君が俺を恨んでも構わないよ。許してくれ…」

父はそういうと家だけを残して去って行った。

母はどんな気分だっただろうか。自分以外の女を抱き、愛してしまいい自分の所から去って行く父に頭を下げまるであの母の姿は命乞いだった。美優は父を憎んでいた。けれど家を残してくれたおかげで住家を失う事は免れていたためその点は感謝をしていた。それか

ら幾年かが過ぎ美優は16歳になっていた。

美優は母に似て大人しい性格で成績も良くよく学校案内のパンフレットにのるようなまじめな少女に育っていた。

友人も美優と同じでまじめな大人しい子達が多かった。

昼食の時間、美優はいつも弁当を持って来ていた。美優の弁当の内容はいつも同じで焦げて形の悪い卵焼きに冷凍食品とご飯である。

しかし美優はそのお弁当が何よりも楽しい時だった。「美優ったらまた卵焼き一番最後に残してる」

友人の朝海が笑いながら美優に言った。

「だってこれが一番美味しいんだもん。」

美優も笑顔で答えた。

この卵焼きは母が作ったものだった。

美優は学校が終わったら毎日スーパーでアルバイトをしており夕食は惣菜売り場で売れ残ったお弁当を食べるのが日課であった。そして母は朝はリウマチで動く事が出来ないため朝食も毎日弟と2人ですべてしていた。そのため母はせめてお弁当位は母親の味をと毎日寝る前に明日の卵焼きを作ってくれるのだった。けれど今や箸もうまく持てない母親には卵焼きを作るのはかなりの重労働で美優にはこの母の愛情あふれる卵焼きが大好きだったのだ。友人達も皆、美優の家の事情は知っておりからかう人などいなかった。

そんな時だった。美優の幸せはそうそう長くは続かなかったのだ。

美優がいつも通り学校が終わってからスーパーでレジを打っている時だった。

「美優さん、お客来てますよ。」

店の従業員が声を掛けてきた。

従業員の指差す方向には中学1年の弟が立っていた。 「すいませ
ん、すぐに仕事に戻りますので。」

美優は従業員にそういうと弟の所行った。

「どうしたの？ 仕事場にはあまり来ないように言っただでしょ。」

弟は不安そうな顔をして美優に声をかけて。

「お姉ちゃん、お母さん倒れて入院しちゃった。」

美優はその言葉が信じられなかった。

少しの沈黙の後弟が声をだした。

「僕達明日からどうなるの？」

美優はその言葉にすっかりしなくてはと思った。

「お母さんの状態は？」

「足の骨を折っちゃったんだって。 母さんは大丈夫って言っただけ
ど…」

弟は不安そうに美優に話しかけてきた。 そのため美優は笑顔で、

「足の骨折っただけか… とりあえず安心だよ。 命には別状ないんだ
から。 お姉ちゃんが後で病院に行って話し聞いてくるから大丈夫。

たつくん（拓也・弟）は家で待つてね。」

弟は少し不安だが帰っていった。

しかし美優は内心弟よりも恐れていた。

母はリウマチの持病のため、骨は折れやすくなっていた。 そして今
でもだいぶ関節がリウマチのせいで硬縮（固まって動かないこと）
していて障害があるのに、骨折してベッドで安静にしているとまず
まず進行するおそれがあるのだ。

そうなれば骨折が治ってももう働きに出る事は無理である。

そうなると今ままで頼っていた母の給料が0となってしまう、収入
は自分のバイト代と母の保険金しかないのだ。

美優は今後の不安でいっぱいだったが、

「これからは私がしっかりしなくちゃ。」

美優は覚悟を決めた。

16歳で母と弟を養って行く決意を決めた美優だったが、これから
おこる過酷な日々には美優はまだ気付いていなかった。

幸せだった日々（後書き）

これから徐々に連載していきたいと思いますので宜しくお願いします。

試練の始まり（前書き）

この回では美優に現実がふりかかってきて覚悟を決める段階です。

試練の始まり

美優はバイトが終わった後病院へと行った。病院に着くと母がベッドに横たわっていた。

「美優ちゃん？」

「…お母さん、体調どう？」

美優は作り笑顔をした。母にも心配はさせたくない、けれど現実を考えると心配せざるおえない状況であった。

「体の方は大丈夫よ。先生にもね、入院したら治療費も入院費も掛るから自宅療養に出来ないか頼んだんだけど、松葉杖をこの変形した手では使えないだろうからって。」

母は申し訳なさそうな顔をしている。

「でもそれなら仕方ないよ。松葉杖使えなかったらお母さん私とたつくんが学校の時トイレも行けないよ。治るまでこっちは大丈夫だから安心して休んでよ。」

美優と母が話していると看護師が話し掛けてきた。

「美優さんですか？先生がお話があるそうなので、来てもらえますか？」美優が立上がり看護師の方へ歩いて行っていると母が

「美優ちゃん…ごめんね。」

母も辛いだろう、美優は思った。

「なに謝ってるの？大丈夫だから心配しないで。ちょっと行ってくるね。」美優は看護師に着いて行きながら不安だった。

16歳の心の中は不安以外何もなく、少しでも押してしまうと倒れてしまいそうだった。

医師の待つ部屋に入ると30代後半だろうか、顔の整った綺麗な顔立ちの男性医師が待っていた。

「美優ちゃんかな、主治医柊です。宜しく。」

「美優です宜しく願います。」

美優は母の病状を聞いていた。病状は美優の思っていた通りであり

また、予想外なものだった。

「骨折については大丈夫だよ。一か月もしたら治癒するし。ただね、お母さんは膝の関節部分を折ってしまっていてね、リウマチで関節が硬縮していることもあるけど、多分骨折した側の右足の関節は動かなくなると思っただよ。」

「はい……」

「で長期の入院でリウマチの他の関節部分も硬縮が酷くなると思うから退院してももう自宅療養は難しいと思っただよ。」

美優には自宅での生活が難しくなるまでは考えていなかった。

「でもまだ母は47歳です。施設といっても入所出来る場所はなかなかありませんし、費用が……」

美優の家庭では施設に母を入れるようなお金は無かった。

「とりあえず自宅でホームヘルパーを頼むという選択もあるしそのことはじっくり一緒に考えよう。」

美優には不安が増えていく一方だった。

「あの……今回の入院費と治療費は幾らぐらいですか？」

「40万位かな……大丈夫そうかな？」

柊先生もナースも心配そうに美優をみていた。

「大丈夫です。どうかして集めます。」

美優は笑顔で言ったが、美優の月のバイト代は朝の新聞配達とスーパーのレジ打ちで10万円位だった。後は弟の新聞配達の2万円と母の保険金の12万である。どう考えてもたりなかった。

美優が少し黙っていると柊先生は笑顔で

「無理に今月中に返さなくて良いからね、ゆっくりで良いよ。」

柊先生のその一言は優しく助かったが、この一か月後もこれからは母の介護費が必要になる。その費用今後毎月払うためには今月中に払うしかないと思っていた。

病院を出ると外は雪が降っていた。

空を見るとパラパラと落ちて来る雪が顔にかかる。

美優は涙が流れてきた。

涙が止まらない。

「家に着くまでに涙を止めなくちゃ……。でも涙が止まらないよ。」
美優は人の流れる道路のすみでひとりとなり涙を流し続けた。

しばらくすると美優は立上がり、何も無かったかのように家に向かって歩きだした。

試練の始まり（後書き）

次回からは美優に実際に試練が振り掛ります。
て戦っていく美優の姿をみていてください。

抗っ

パンツ売ります(前書き)

美優はついにはならない事に手を出してします。 美優自身が
自分を傷つけてしまう。

パンツ売ります

家に帰るとたつくんが玄関にやってきた。

「おかえり、お姉ちゃん。先生なんて？」

美優は拓也には迷惑をかけたくなかった。「ただいま。大丈夫だつて、だからたつくんは心配しなくて良いよ。」

そついうと拓也は凄くほつとした姿をしていた。

「でもねたつくん、お母さんもう働けないかもって、だから…少し前よりも苦しくなるけど大丈夫かな？」

美優は拓也には何も悩ませたくなかった。しかしどうしてもいずればれてしまう事は言わなければならない。

拓也からの返事はなかなか返ってこなかった。

「大丈夫だよお姉ちゃん。俺も新聞配達の仕事増やすし、内職もするよ。お姉ちゃんだけが苦しまなくて良いからね。」

拓也が笑顔で言った。

拓也の給料なんてどんなに頑張っても大体がしれている。しかしその拓也の優しさと、そのたくましさに美優は心から救われた気がした。

「ありがとう、たつくん。お姉ちゃんも新しいバイト探して頑張らなきゃね。」拓也は

「そつだよ、一緒に頑張ろうよ。」

美優はいつの間にかこんなに大きくなつたんだろうと拓也をみていた。

「お姉ちゃん、家事全般全部僕がするからね。」

「ありがとうたつくん。」

三つも年の離れた弟がこの現実になにやら紙切れが置いてあった。美優は強くならなきゃと心に決めた。

美優が風呂からあがると机の上になにやら紙切れが置いてあった。

その紙切れを開くと拓也の字で美優宛のものだった。『お姉ちゃん、どんな時でも2人で頑張ろうね。いつも笑顔でいようね。』美優はその手紙を胸に押さえつけ一粒の涙を流した。「ありがとう、たつくん。」

次の日からの学校の弁当には拓也の手作りの綺麗な形の卵焼きが入られるようになった。味は母にそっくりでとても美味しいのだが、友達に何か質問されるのが嫌で美優は一番最初に食べていた。

月日はあつという間で母が入院してもう一週間が過ぎていた。

美優はバイト先を探すもののなかなか良いものはなかった。

今のスーパーのバイトは給料が安く良い訳ではないが弟と2人分の余ったお弁当を頂けるためそれを失うのは避けたかった。しかしスーパーのバイトが終わってからで、良いバイトと言うのはなかなか無く、朝の新聞配達とスーパーの働く時間を少し伸ばしてもらうなどしか出来なかった。

ある日美優はスーパーのバイトが入っておらず久しぶりに母の見舞いに行こうとふらふらと町を歩いていた。

しかし頭の中は後3週間でどうやって残り三十万を作るかでいっぱいだった。

そんな時、ふと店を見るとネットカフェがあり、美優は何か良いバイトは無いか探してみようと店の中へ入っていった。

店に入ってネットでバイトを探していると、なかなか良いものは無かった。

美優は諦めて母の見舞いに行こうとスイッチを切ろうとした時ある文章に目が止まった。

『あなたの下着売ってください。』美優はこういうのは駄目だとス

イチを切ろうとしたが、実際問題このままでは金はたまらないし、生活はやっていけない。美優はそのサイトをクリックしてみた。すると、

『あなたのショーツまたはブラジャー売りませんか。』

『ブラだと一枚三千円』

『ショーツだと織物付きは五千円』、付いてなければ三千円』

とあった。そしてそのサイトはアドレスを登録すると、お客からメールが来ると言うものだった。

美優はしなければ良い訳だからとりあえずアドレスだけ登録して店を出た。

病院に行くとき母がベッドから外の景色を見ていた。

「お母さん。」

美優が笑顔で言った。

母からの返事は無く、美優は気にせず話した。

「今日体調良い？今日久しぶりにバイト休みだったんだ。果物かなんか食べる？」

しかし母は返事を返して来ない。

「お母さんどうしたの？」

美優がそう聞くと母は凄く小さな声で何か言っているが聞きとれなかった。

「どうしたの？」

しばらく美優が見ていると母は美優を睨んだ。そして続けて話し始めた。

「あんた達は、お母さんが入院して家にいないからって毎日楽しく過ごしてるんですよ。」

母がいきなりこんな事を言うから美優も驚いてしまった。

「そんな訳ないじゃないお母さん…。」美優が母の肩に触れようとすると母は美優の肩を振り払い、

「私が入院しても誰も見舞いになんか来てくれない…私は主人にも

子供達にも見捨てられたのよ。」

そう言うと母は泣き叫んだ。体を震わせながら泣く母の姿に美優はどうしたら良いか解らなくなった。「お母さん、私お母さんを見捨てたりしてないよ。ただね、お金を稼がないといけないからなかなか来れないだけなんだよ…ごめんね。」

美優が母に謝ると母は

「ごめんね、私のせいで…」というずっと泣いていた。

その時入口でひとりのナースが美優を読んでいた。

美優がナースに母の事を聞くと、母は今の積もり重なってきたものがたまりに募って、うつ状態にあるということだった。ナースが「お母さんは今自分の事で精一杯なの。解ってあげてね。」と言った。

美優は

「はい」と返事しながらも母の状態を真剣に心配してあげられるほど心にゆとりがなく、少しの苛立ちを感じていた。

ナースステーションの前を通るとナース達がこそこそと話しているのが聞こえた。「智華（母）さんのお子さん達、もう少し来てあげられないのかしらね。」

「智華さんがあんな状態なんだからもっとそばにいてあげてもね。今まで智華さんがあの体で頑張って働いてくれてたっていう感謝はないのかしら。」

美優は看護師のその話を聞き、怒りと悲しみを感じていた。

自分の無力さと、情けなさに悲しくなっていた。自分がどんなに頑張っても母には伝わっていない。人にすら…美優が涙を拭こうとした。そんな時病院を出たと同時にメールがきた。美優はメールをみると、

『私は55歳の男です。あなたのパンティ五千円で売ってくれませんか。』

というものだった。その他にも似たようなものが何通あった。

美優はそのメールをじっとみて

「これでお金が沢山入るとお母さんの見舞いも行けて、あんなこと言われないのかな…」

そう思っていると美優は全てのメールに『はい』と返事を打っていた。そして町をふらふらと歩き家へ帰っていった。

家に着くと拓也が料理を作って待っていた。

「おかえり、お姉ちゃん。」

拓也の笑顔を見ていると美優もだんだんと笑顔になった。

「ただいま」

そして今日の母の状況を伝え、拓也にお見舞いに行く回数を増やせないか頼んだ。すると拓也は笑顔で一日置きに行ってくれる事を約束した。

その日の夜、さっきのメールをみると、ひとりの人から履いている証拠の写真とパンツを封筒に入れてB駅のコインロッカーに入れる約束をした。そして鍵はB駅の1番ホームのイスの裏に貼っておくことを約束した。そしてお金はA駅のコインロッカーに入れて置くとのメールがきた。そして鍵はA駅の掲示板の裏に張り付けておくとのメールがきた。

共に明日の4時から6時の間に行う約束をした。

それぞれコインロッカーの鍵を隠す場所のみ別々にし明日だけで6人と約束を交わした。

次の日、拓也が

「いってきます。」と家を出た後、町の百円均一に行き、パンツを6枚買い、家に帰った。そして一枚一枚履いてトイレで自分で自分の太股から臍あたりを写真で撮っていった。

なかにはポーズを指定してきた人もいたため、開脚やう。こ座りなどの写真も撮った。

全ての写真を撮り終わると次は全てのパンツに織物を付けていった。そんな事をしているとクラスの朝海から電話がきた。「はい。」
美優が後ろめたい気持ちを感じながら出ると、朝海の元気な声が聞こえた。

「私、朝海。ちょっと風邪なんだって？大丈夫？」

美優はその声を聞きながら涙がこみあがってきた。

「うん大丈夫（自分は何をしているのだろう）。」

「うん、バイトは行かなきゃ。うん。」

大丈夫だよ、明日は学校行くから、うん。ありがとう。」

美優は言葉とは裏腹に今から自分のする事は友人も母もそして弟も裏切る事になるような気がして恐ろしくなってきた。

「私は今、取りかえしのつかないことをしようとしているんだ…。」
解っているにも美優には止める事は出来なかった。

そして6時を過ぎた時、男達の手には美優のまだ誰にも見せたことのないパンツ姿のう。こ姿勢の姿や開脚した姿の写真と共に少し濡れて染みの出来たパンツが行き渡り、男達の今夜の遊び道具となった。

そして美優のともには3万円と悲しみと悔しさが残った。

美優は涙を目に浮かべながらお金を鞆にしまい、スーパーのバイトへと行った。

パンツ売ります（後書き）

これから女優はどんどんしてはいけない世界へと足を入れていきます。そしてこれは全てフィクションです。

夜の世界への決意（前書き）

美優は友人晃奈にパンツを売っていることがばれてしまう。晃奈はそんな美優にいったい何と言うのか。

夜の世界への決意

気がつけば母が入院して3週間が過ぎていた。

その間に美優も拓也も何度か時間を作り見舞いに行っていた。

美優に至っては学校の先生にお願いし、昼休みや自習の時間にお見舞いに行かせてもらっていた。

そのお陰もあり、母は少しずつ精神的に回復に近付いていた。

もうあの時のようにどなったりはしなくなった。

ナースステーションで文句を言っていたナース達も家の事情を知り、美優と拓也を理解してきていた。

何かとも良い方向にいつているように見えるが美優の心の中はほとんどと元気を失っていつていた。

いつものように変わらない姿のように見えるが、この世の中に希望を持ってはいないような、自分の人生に諦めを感じているようにも見えた。

美優は母が入院してから3週間ですでにパンティーを20枚売っていた。

パンティーを売って10万円を手に入れていた。そしてバイト代の14万と母の保険金の12万で合計36万円たまっていた。

拓也の内職と新聞配達代の4万は生活費に使わせてもらった。

残り4万をどう返すか美優は悩んでいた。パンツを売るのも欲しがる人がもうあまりいないのだ。

そして美優は出来れば拓也のお金には手を付けたくなかった。拓也が2年後高校に行くための費用も貯めて行かなければならないから

である。しかしそれも今月は諦めようとは思っていた。

美優が学校で授業を受けているといつもあまり学校にこない晃奈が遅刻して入ってきた。

優等生的な美優とは対象的で制服はかなりのミニスカートに、髪はパーマのロングでブロンド色と不良生徒として先生達からは嫌われていた。

しかし、性格は明るく話してみると実は友達思いの良いやつだとクラスの子達には好かれていた。

「晃奈おはよう。久しぶりだね。珍しいじゃん。」

クラスの子達が話し掛けていた。

「ちよつと用事が出来てさ。」

晃奈はそういうと立上がり美優の方へやって来た。

「美優、腹減った。購買着いて来ちゃらん？」

晃奈がお腹を押さえながら美優に甘えてきた。

美優も笑いながら「行こうか。」とクラスを出た。

対象的な2人だが幼稚園からの幼馴染みで家族内の相談もなんでも話せる数少ない友人だった。

売店で晃奈は

「着いて来てくれたお礼」とほつとココアを買ってくれた。

売店で買い物を終え、教室に戻ろうとした時に晃奈が美優を止めた。

「美優、ちよつと屋上行かない？」

美優は笑いながら晃奈に返事を返した。

「晃奈、久しぶりに来た学校でいきなりさばり？」

美優がクスクス笑っていると、

「ちょっと話しがあつて、今日はこのために来たんだよ。」
晃奈にそう言われ美優は珍しく授業をさぼった。

屋上に出るとまっさらな青い空が一面に広がっていて、美優は久しぶりに空をみた気分で気持ちが良かった。

美優が気持ち良さそうに深呼吸をしていると晃奈が話しだした。

「私さあ、学校止めることにしたんだあ。」

美優は驚いて晃奈をみた。すると晃奈は美優の辛さを全て包み込むような笑顔で話しを続けた。

「私の家はさあ、父子家庭で私は一人っ子だけど、私の父さんも病気だし、私達の家の事情って似てるよね。」美優はうなづいた。

「だから私達はずっと一緒だったのかもね。」

晃奈がそういうと床に座った。

「美優はずっとどんなに家庭が苦しくてもまじめに学校行つて、バイトしてたよね。私は水商売とかバーのお店とか昔から年齢隠して金稼いで私達はいつも正反対だった。」「そうだったね。」美優はそういうとココアを飲んだ。「私のお父さんも来月位から入院するんだあ。」

「お父さんそんなに悪いの？」美優が心配そうに話し掛けると晃奈は「そろそろ家庭生活には限界がきてたんだよ。父さんはこれから人工呼吸器とか必要になってくるから、ずっと入院生活になるし、私は別に勉強出来る訳じゃないし、学校も好きじゃないから丁度良かったの。学校止めて本格的に夜の仕事しようかなって思ってたし。」美優は晃奈は強いいつも思っていた。

「晃奈は凄いな。どんな時でもめげずに頑張ってる。」美優が晃奈にそういうと晃奈は、

「あんたも偉いよ。でも美優、頑張るのと意地をはるのは違うよ。」

晃奈は立ち上がった美優を見つめた。

晃奈の目は怒っていた。

「どうしたの、晃奈。怖い顔して」

美優が困っていると、

「あんた今男にパンツ売ってるでしょ。」

美優は驚いた。

なんで知ってるのだろうと言う顔をしていると晃奈は美優の返事を
またずに話し始めた。「この前仕事に行く時に丁度あんたみて、
着いていたらあんたが金貰ってるの見つけて…」晃奈がそう言う
と美優は恥ずかしくなつて晃奈と目を合わせられずにいた。

「あんた何やってるの？」

晃奈は美優の前に立ち、話し始めた。「おばさんと拓也がそんな
事してたつて言ったら悲しむとは思わないの。」

美優はそんな事は解っていた。だが他に解決方法を美優は見つけら
れていなかった。美優が口だけで言うのは簡単だと思った。

「晃奈だつて学校止めて夜の仕事するつて、お父さんは悲しいはず
だよ。」美優がそう言うつと晃奈は少し怒っていた。

父親からすると確かに娘が夜の仕事で自分と同じ年位の男の相手をして
いるのは気に食わないだろう。「私の事は良いの。確かに始め
は金を沢山稼ぎたくて働いたわ。でも仕事をしていると、この仕事
が自分に合っていると思つた。だからこの仕事で食べて行きたいと
思つたのよ、なら嫌な勉強をわざわざ続けなくても良いから学校や
めるの、父は関係ない。」

晃奈は美優を睨みながら続けた。

「でも美優のやっていることは私のしている事とは違うよ。」

美優も解っていた。晃奈のやっている事と美優のやっている事が違
う事位理解していた。しかし自分のやっていた事をどうにか正当
化したくてむきになつてしまっていたのだつた。

「晃奈…ごめん。」

晃奈は首を横に振り、美優を見つめて話し始めた。「お母さんの入
院費で苦しんだの？」美優は首を横にふつた。

「それだけじゃないの、これからの事とかを考えるとゆっくり返す訳にもいかないし、母のお見舞い行かなきゃだったから。」

「これからどうするの？」

晃奈の質問に美優も悩んでいた。

これからは収入先はまたバイトと保険金のみになってしまう。

晃奈は悩んではいたが美優に提案をした。

「私の働いている店でバイトしてみない？」

美優は驚いていた。バイトを探す時は水商売だけは駄目だと思って、気にもしていなかった。

しかし、確かに今私のしている事よりはマシかもしれない。美優が黙っていると、晃奈は話した。

「私も美優にこの仕事を進めるのは悩んだよ。でも今のまま下着売り続けるよりは良いと思ったの。」

美優もそうだと思いとりあえず体験をさせてもらう事にした。

晃奈に明日にでも体験させて貰えるよう話していると晃奈が美優に申し訳なさそうに話した。

「ごめんね美優、助けてあげられなくて。」

「十分助けて貰ったよ。ありがとう晃奈。」

そして美優は次の日スーパーのバイトが終わった後、晃奈の家の前に行った。

美優は不安でたまらなかったがインターホンを押すと「はい。」と晃奈の元気な声と共に夜の衣装を身にまとった晃奈が玄関から出てきた。

「待ってたよ美優。ドレスとメイク貸すから入って。」

美優は晃奈の部屋に入っていた。

晃奈は美優に水色の綺麗なドレスを着せ、髪も綺麗にアップしメイ

クもいつもよりかなりケバイ姿に変身させた。

その姿は本当に可愛いく、人気がでるのは間違い無かった。

晃奈は美優の姿をみて話し始めた。「嫌だったら絶対にすぐ言うてね、無理に頑張ろうとしないで、約束してね。」

美優は晃奈に

「解った」とうなづくと、夜の世界へと足を踏み入れていったのだった。

夜の世界への決意（後書き）

次の話しからは晃奈の働くお店で働きだします。夜の世界へとどんどんと足を踏み入れていきます。また観てくださいね。

水商売で働く日々（前書き）

いつも呼んでくれてありがとうございます。これから少しずつ書きますので見てくださいね。

水商売で働く日々

晃奈の働く店に入ると、一番年配そうな女の方が美優に近付いてきた。「美優ちゃんね、晃奈から話しは聞いてたわよ。今日は気楽に見学していつてね。」

美優は優しい笑顔の女性だと思った。自分の想像していたような人ではなかった。

「今日は宜しくお願いします。」

「今日は晃奈ちゃんに着いて回つてね。」

「はい。」

美優はずっと晃奈といれることにほっとしていた。美優が店の中を見回していると晃奈が美優を読んだ。「美優、みんなに挨拶するから来て。」美優は晃奈の方へ行つた。

そこには晃奈と別に4人の女性がいた。

「美優です。今日は宜しくお願いします。」

美優の挨拶の仕方をみて晃奈に4人の中で一番若い美保が話しかけた。「晃奈、凄いまじめっばいんですけど。」と美保はクスクスと笑っていた。

すると先程挨拶をしたこのクラブのママが美保を軽く叩いた。

「こら。まじめに挨拶する事の何がおかしいの。良いことじゃない。」

すると美保は、「別におかしいだなんて思つてはないよ。ごめんね、美優ちゃん。だっけ?」

美優もみんなが優しくそうなのでほっとしていた。

すると美保が

「ただこんな性格も大人しそうで真面目そうな子がこんな所で働くのが不思議なだけ。」

それは他の2人も思っていた。

しかしママは晃奈から大体の理由は聞いていたので気にしていなかった。むしろママは美優の手助けをしてあげたいと思い、今回店に

入らないかとママが晃奈に聞くように頼んでいたのだった。

そして美優の姿をみてママはこの子の手助けをしてあげたいと思っていた。

すると他の2人も自己紹介を始め、

「私は麻由で、一番身長高いこの子が亜美。宜しくね」 美優も挨拶をすますとママが話し始めた。

「はい、では今日も頑張りましょうね。あ、それから美優ちゃん、お客さんには本名は嫌でしょ、ミーちゃんにしようね。」

美優が返事をしていると晃奈が横から

「私はアキだからね。」と言ってきた。

そして客が入りだした。どんどんと中年のオヤジ達で席は埋まっていった。

するとママから、「アキちゃん、あちらのお客様のお相手してあげて。」

晃奈はママに返事をするとお客の所に行った。

美優もその後ろを着いていった。

その席にはオヤジが3人いた。

「こんばんは。アキです。今日はありがとうございます。」

いつも聞いている声よりも高く、そして甘えた感じのする話し方をする晃奈に美優は驚いていた。

「アキちゃん、早く酒作ってよ。」常連だろうか、もうだいぶ出来上がった状態である。

すると晃奈が私を紹介した。

「その前に、今日は新人のミーも同席させて頂きたいんですけど良いですか？」

酔ったオヤジ達は美優の姿に見入っていた。

晃奈によって化粧された顔は誰からみても美人だったのだ。

「良いよ〜こんな綺麗な子とお話し出来るなんて嬉しいなあ。」

オヤジ達の声が飛び交う。

「じゃあミーちゃん、みなさんにご挨拶して。」

晃奈が美優の背中を軽くおした。

「ミーと言います。今日は宜しくお願いします。」

そして仕事の時間が終わり時計は2時を回っていた。

「はい、今日もお疲れ様。」

ママの元気な声が響いた。

そしてみんなが片付けを済ませ帰ろうとした時、美優はママに呼ばれた。

「美優ちゃんどうだった？」

美優はママに怒られるかと思っていたので少しほっとした。

「凄く難しかったです。すいませんでした、あのうまく相手が出来なくてお客様を怒らせてしまつて。」

美優は晃奈と席に座っている時にひとりのオヤジから太股を撫で回されてその手を

「嫌。」と言ってしまったのだった。

慣れている晃奈や他の女性達はうまく怒らせないようにのけていたのだが美優は怒らせてしまったのだ。そして晃奈がフォロ〜を入れてその場をどうにかのりきっていた。

「最初はそんなものよ。少しづつ覚えてくれたら良いからね。」

美優が

「ありがとうございます。」と挨拶をすると、ママが、

「これから働いてもらえるかしら？」

美優は悩んでいた。美優はこういう仕事は苦手だかなり収入はよく、そしてなにより今のままでは生活出来ない。美優は悩まなくても答えは出ていると思った。

「ここで働かせてください。宜しくお願いします。」

そして美優はこのお店で働く事を決めたのだった。

「ただいまあ。」

美優が家に着いたのは3時を回っていたが拓也は起きて待っていた。
「おかえりお姉ちゃん。ご飯食べる？」美優はもうくたくただった。
「今日はもう良いや。」

一度晃奈の家に行き、ドレスも脱いで化粧も落とし、そこにはいつもの美優の姿があった。

やはり美優は家族にはこの仕事は隠すつもりらしい。

「たつくん、お姉ちゃんね、スーパーのバイト辞めて他のバイトする事にしたからね。」

美優がそういうと拓也は少し不安そうに尋ねた。

「何の仕事なの？」拓也も中学1年生だ。こんな時間まで働く仕事なんて良くない仕事でしかないように思えて当然であろう。「24時間のビデオレンタルショップだよ。少し遠いけど夜中は時給が良いんだ。だからたつくん夕食はこれから作らなきゃいけなくなるけど大丈夫？」

美優が聞くと拓也は、

「夕食の心配はしなくて良いよ。ほんとにビデオ屋なの？それに夜中のバイトなんて危くない？」

拓也はまだ心配そうだった。

「大丈夫だって、レジでレンタルビデオ渡すだけだもん。それにね、晃奈も一緒だから。」

「晃奈ちゃんと一緒になの？」

拓也は晃奈と一緒になら安心かと言うようにほっとしていた。

「お姉ちゃん良い仕事見つかった良かったね。」

拓也が満面の笑みでそう言うため美優は後ろめたい気持ちになった。
「ああ姉ちゃん、お母さんね入院が長引きそうなんだって、先生が

来れる時に病院に来てって。」

美優はまたお金が掛るのではと不安になったが拓也に心配もかけられないので解ったとだけ言って、その日は眠った。

次の日病院へ行き、始めに母に会いに行った。

「お母さん、来たよ。」

すると母は丁度関節の痛みが酷く、横になっていた。「お母さん大丈夫？」

美優が心配そうに見つめていると母は美優の手の上に手を置いて、「美優ちゃんごめんね。お母さんいつも美優ちゃんに迷惑掛けて、頼ってばかりで。」

「そんな事ないよ。」

美優は母の手に驚いていた。母の手は本当は美優の手を握りたかったのだ。しかし手の変形の進行によって指を動かせなくなっていたのだ。

美優は病状が気になり母に尋ねた。「最近どう？関節は痛む？」

「最近痛みも強くなったし、体が動かなくなってきたわ。自分で体の向きも変えられなくなってしまっ、もう美優や拓也に迷惑ばかり…」そう言うとき母は涙をぼたぼたと流していた。

「そんなことないから、安心して休んでね。」

「でもお金が…」

「お金の事は気にしないで良いから、拓也と2人で頑張ってるし。」

美優はそういつと先生に呼ばれているからと一度病室をでた。

美優は不安だった。今の母の状況をみていると家庭生活が無理という問題よりも施設も無理のような気がした。美優は早く先生の話を聞きたくて急いで先生のいる部屋へと行った。「失礼します。」

美優が入ると柊先生が笑顔で迎え入れてくれた。

しかし柊先生は美優の表情や体の変化に驚いていた。3週間前始めて美優を見た時の世の中の汚い姿など何も知らないような純粋な面影はなかった。

世の中に諦めを持ったような、そして自分の未来になにも期待などないような表情、そして痩せてやつれた美優がいたのだ。

晃奈や拓也、そして学校の友達などは毎日会っているため、少し痩せたとは思っても表情の変化までは気付かなかった。

しかし柊先生、そして実は母もその美優の変化に気付いて不安になっていた。

柊先生は、

「まだ高校1年なのにとっても苦勞したのだろう。」と思っていた。すると美優が封筒を柊先生に渡した。

「先月の治療費と入院費です。40万入ってます。」

昨日店を出る時ママが美優に10万を貸してくれたのだ。

働くために必要なドレスを買いなさいと言って渡されたが、ママは美優が母の治療費代で苦しんでいる事を知っていたため多くくれたのだった。

柊先生は驚いていた。このお金をいったいどうやって集めたのか不安になった。

美優は

「親戚の家を回って助けてもらいました。」と嘘をついた。

そして柊先生が心配そうに美優を見つめていると美優から質問を始めた。

「弟から入院がのびるかもと聞いたのですが…」「ここに来る前、お母さんに会ったかな？」

「はい…」

「見ての通り、お母さんもう関節痛が酷くて常時、鎮痛剤が必要だし、からだを動かすことも難しくなってきたからね、もう施設より病院のほうが良いと思うんだよ。」

美優は今月40万を集めるのにどれだけ大変だったかを思いだしていた。

新聞配達もしたし夜までスーパーでバイトしてパンツまで売った。バイト先が変わったため、収入はあがるが毎日出なければ足りない

はずだ。

「解りました。やはり毎月40万位掛りますか？」

「いや先月みたいに沢山検査とかもつしないから毎月30万位だと思っただけど。」

10万も減るのは凄く助かるが、これがかれからずっと続くとなると不安だった。

しかしやるしかないと自分に言い聞かせた。

「解りました。これから母を宜しく願います。」

美優はそういつと部屋を出ようとした。

「美優ちゃん、ちよつと待って。」

柊先生が美優を引き止めた。

「美優ちゃんこの40万貯めるのに物凄く君が苦勞したのが解るよ。でもこれから毎月30万は高校生の君には無理だろう。市に申請してあげるから生活保護金を貰うとかしないかい？」

美優は生活保護だけはまだもらいたくはなかった。

「大丈夫です。母の保険金の12万と拓也と私のバイトでどうにかなります。心配してくださってありがとうございます。」

「君が心配なんだ。」

柊先生はなぜが美優がとても心配だった。

ひたむきに頑張る美優に自分が変わってお金を出してあげたいとまで思った。しかし医師の立場でそんなことは言えない。柊先生の中で美優は守ってあげたいと思う存在になっていたのだ。そしてそれはただひたむきに人生に立ち向かう少女に対しての同情なのか、それとも愛情なのか柊先生にも解らなかった。

「ありがとうございます。でも大丈夫ですから。」

そついうと美優はママのいる夜の店へと向かって行った。

それからの美優の生活というものは過酷その物だった。

学校が終わるとその足でデパートのトイレで 着替え、化粧をし、店へ行く。3時に家に着くと風呂に入りそのまま寝る日々の繰り返しだった。夕食は摂る事が出来ず、毎晩お客とお酒を飲む生活。気付けばかなり痩せて美しさは増していたが健康な姿には見えなかった。

それでもこの生活を3ヶ月程繰り返していると美優自信、そろそろこの生活をどうにかしないとからだが持たないと思っていた。

そんな時お客の相手をしているとひとりの客こう言われた。

「いやゝミーちゃんほんとに可愛い。君がもしまだ処女なら僕は50万だしても買うよ。」美優はその言葉を聞いて思った。

一回我慢してオヤジに抱かれたら私はもう少し寝られるかもしれない。

その次の日美優は学校をさぼりネットカフェにいた。

そして美優はためしに打つてみると、インターネットを開き、検出してみた。

『私の処女幾らなら買いますか。』

水商売で働く日々（後書き）

美優はこれからどんどん自分を苦しめていきます。拓也は美優のそんな姿に徐々におかしいと思いはじめ…。美優が頑張る事が出来るのは弟拓也と母、家族を守りたい、そして3人でまた幸せな日々を過ごしたいためなのに…。またみてくださいね。

処女を売ります（前書き）

遂に美優は処女までも…

処女を売ります

美優は次の日学校に来ていた。

晃奈はもう学校を辞めており晃奈の座っていた席は空席となっていた。

「おはよう美優。」朝海が声を掛けてきた。

「おはよう、朝海。」

朝海自身、美優が最近痩せてきていることを気にしていた。

「ねえ美優、最近どんどん痩せて来ているけど大丈夫？無理してない？」

「大丈夫だよ、ちょっとダイエットしてただけだから。」美優はまだ学校ではうまく優等生を演じていた。

ロングの黒髪に軽く掛けたパーマもいつも三つ編みにし隠し、顔もすっぴんで来ていた。

それでも毎晩オヤジ達の相手をしているからだろうか、美優からはどこか色気がみえ、綺麗になっていて、クラスの男達からの視線も変わり始めていた。

「あ、美優。先生が職員室に来てって言ってたよ。」

朝海はそう言うのと他の友達の所へ行った。

美優は大体の呼ばれた理由は気付いていた。

恐らく最近授業中、良く寝ていることと、成績が落ちてきている事が理由だろう。

美優の学校は進学校である。

美優はどうせ進学出来るかも解らないのに進学校になんか来るんじや無かったと思った。

職員室に入ると担任の細川が呼んできた。

生徒相談室に招かれ入ってみると他には誰もいなかった。

「お話しとは……。」 美優はそう尋ねると細川は話し始めた。

「美優は最近学校でも居眠りが目立つと先生方から聞いたよ。成績も下がる一方だし、やはりお母さんの具合が悪いのが原因なのか？」 美優は思っていた通りの事しか言わないと思いながらも今まで何一つ心配なんてしなかったくせに、成績が下がりだしたら母の病状を尋ねるなんて失礼だと思った。

「すいません。バイトが忙しくて、これからは気をつけますので。」 美優はそう言うと言頭を下げた。

すると細川は、

「美優、高校生が何に一番頑張るべきか、解るよな。勉強だぞ。お前はなんのためにこの学校にいるんだ。良い大学に行って、良い会社に勤めるためだろ。」

「今はお金に苦しくても小遣いを貰えなくても我慢しろ。」

細川の発言に美優は怒りと悔しさを覚えた。

そして遂に美優は優等生と言う肩書きをすて、先生に怒りをぶつけた。

「先生は、お金に苦しんだことが無いようですね。」 細川はいつもの美優の表情、声の感じが違う事に驚いていた。

細川の中で美優は先生の話を良く聞く、頭の良い生徒だったのだ。

けれどそんな美優はとうに消えてしまっていたのだ。

「私はお小遣いが欲しくてバイトをしている訳ではありません。生

きて行くために働いているんです。」

美優はそう叫ぶと立上がり、

「これ以上成績が下がらないよう気をつけます。失礼しました。」
と言って生徒相談室を出て行った。

その日美優は悔しくて早くこの学校から飛び出したかった。
けれどどうにか1日を過ごして、美優はすぐに学校を出た。
そして昨日のネットカフェに行った。

調べてみると沢山の男の人からアクセスが来ていた。

「優しく抱くからね」

「処女は嬉しい」

「何カップ？」

など美優には嫌気がさすような言葉が並んでいた。それでも美優の頭の中は担任の発言で怒りを感じており、今のこの生活を何をして
も変えたくてたまらなかった。

美優はそこから一番高額なものを探した。

するとほとんどが3万〜10万だったが一つだけ20万という人が
いた。

美優はその人のアドレスを携帯に登録し、ネットカフェを後にした。

そして美優はその男性にメールを試してみた。

すると男性はすぐに美優にメールを送ってきた。

男の質問に一つづつ答えていった。

「胸はCカップ、処女の16歳、身長は162cm、体重43キロ」

すると男性は明日の昼3時に待ち合わせを希望してきたので、美優は料金は前払いを約束し、明日待ち合わせをすることを約束した。

次の日美優は学校をさぼり、制服はスカートを短くし、パンツが見えるスレスレの長さにした。化粧はいつもの仕事メイク。髪もほどき、パーマをだした。

そこには学校の先生達の嫌っていた、晃奈のような美優がいた。

美優はその姿で待ち合わせ場所へと行った。

そこには思っていたような太っていて、脂ぎった中年のオヤジはいなかった。待ち合わせ場所に来たのは、綺麗な高そうなスーツを着た、背の高いカッコイイ四十代の男性だった。

「君がミーちゃんかな？」

その男性もまさか美優がこんなに可愛い少女だとは思ってなかったため驚いていた。「はい……」

美優はそう答えると男性は、

「浅野と言います。じゃ、行こうか。」と美優の腕を掴んだ。

「先にお金をください。」

美優がそう言うのと浅野は美優に封筒を手渡した。美優はその中にお金があることを確認すると、浅野に掴まれたままホテルへと行った。

美優の頭の中は不安と恐怖で一杯だった。

すると浅野は部屋に入るなり強引に美優にキスをしてきた。

美優は初めてのキスだった。

何か力強く唇を押し付けられ気持ち悪さと、恐怖はましていった。

止めたかった。

こんなの間違ってた。

でも恐怖で美優は声が出なかった。
すると男の舌が美優の口の中に入ってきて、舌を絡めたり、口の中をあさられた。

「ん…んん…」

美優が苦痛な声を出していると浅野の右手が美優の太股を撫でながら徐々にまだ美優が誰にも見せた事の無い秘部に近付いてきた。

「ん…?!」

美優は気付いて突き放したかったが浅野はしっかりと美優に絡まり、固定していた。

美優のクリ。リスに浅野の人差し指がやってきた。

浅野は美優のクリト。スをつねったり、撫でたりした。

「ん…んん…あ…」 美優はまだ口の中に浅野の舌が入っていて口を動かせず、浅野にクリト。スを弄られ感じてはいるが、うまく声を出す事が出来なかった。

美優の足が震えだした。

もう自力で立てなくなってきた。

すると浅野は美優を抱き上げベッドへと移動した。

そして美優と唇を離れたと同時にギャンボールを加えさせた。

そして美優にこの行為の拒否が出来ないようにさせると美優の制服を一枚一枚脱がしていき、裸体にさせた。

そして自分も裸になると美優の秘部に顔を近付けた。

美優はもう恐怖でしかなく、もう最初の方からずっと涙を流していた。

すると浅野が、

「下はもうこんなに濡れてるよ。」

と言いい美優の割れ目に指を這わせた。

美優は

「ん」とびくつと体を鳴らした。

すると浅野は美優に覆いかぶさり、少しづつ美優のマ○コにペニスを入れていった。

美優のちつはとても狭くてなかなか入らないが浅野は力を入れて無理やり入れてきた。

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ \neg \\ \neg \\ h \\ \neg \\ \neg \end{array}$$

美優は痛みにさげんでいた。

こんな激痛は今まで感じた事は無かった。

すると…

プチッ…

と音がした。

処女膜が破れたのだ。

後は浅野の思うがままに葬られ、美優も徐々に快感を感じていた。

美優が3回ほどいった後、美優は放心状態で浅野の腕に抱かれていた。浅野は美優の事を気に入った。

顔は可愛いし、自分の思うがままに弄る事が出来る。

「また俺の相手してよ。また金は払うから。」

浅野はそう言うときまた美優に覆い被さり美優は4回目の絶頂を終えた。

その帰り美優はからだにうまく力が入らずふらふらと家に帰る道を歩いていた。

秘部がズキズキした。

目からは涙があふれていた。

美優は今日はバイトが無かった。

美優は帰るなりそのままベッドに倒れて深い眠りに落ちていった。

悲しみと共に手に入れた20万を抱いて。

処女を売ります（後書き）

これからどんどんみてくださいね。

優等生の崩壊 学校退学（前書き）

久しぶりの再開です。是非読んでくださいね!!!

優等生の崩壊 学校退学

拓也が朝目覚まし時計の音で目をさますと、美優の部屋を覗いた。

そこには美優が制服で寝入っていた。拓也は美優が無事帰っている事にホッとした。

けれど美優の手に握られている札束をみて拓也は驚いた。

「お姉ちゃん…。ほんとにビデオ屋さんで働いてるのかな？」

拓也も中学生だ。純粹とはいえ、夜の店や援交というものが存在することはなんとなく知っていた。

拓也がじっと見つめていると美優は目を覚ました。

「たっくん…おはよう。どうしたの？」

拓也は心配そうに美優に話しかけた。

「お姉ちゃん…そのお金どうしたの？」

美優はいくら疲れていたからと言って金を持って寝てしまった事を悔やんだ。

「昨日銀行から降ろしたのよ。今日が病院に払いに行かなきゃいけない日だから。」

拓也はやはり安心があまり出来なかった。

拓也はいつも通り美優より先に学校へ行く準備をして家を出ていった。

しかし外に出た途端に隠れ姉を見張る事にしたのだ。

美優にたいする罪悪感がもちらんあるが不安でいっぱいだったのだ。

その時美優は拓也が自分を心配しているのが解った。

「これからどうやって、たっくんに黙つところかしら。」

美優は不安に思いながらも制服を着て、みつあみをして学校へ向かった。

正直昨日担任にあんな事を言ってしまったことで学校には行きたくないかった。

しかし行かなければ尚更行きにくくなる気がして行くことにした。

美優が外に出ると拓也は美優のほうへと隠れながらついていった。

美優が学校へつくと朝海が声をかけてきた。

「美優おはよー」

「おはよう朝美」

朝美は椅子に腰掛けた美優をみてやはり少し痩せすぎではないかと思っただ。

「ねー美優、やっぱり大変なんじゃない？」

少し痩せすぎだよ。」

美優は笑顔で朝海に返事をした。

「ありがとう。でもほんとに大丈夫だよ。」

「なら今度バイト休みの日私の家に泊まりにおいでよ。」

「でも弟いるし。」

「私の家にも弟いるし、たっくんは優の部屋に泊まってさ。そうしようよ。おいで。」

朝海の必死さに後押しされ美優は明後日泊まりに行く事を約束した。

「母さんに沢山食べ物作ってもらっとくね。」

朝海が笑顔でそういうので美優も楽しみになった。

友達と遊ぶだなんて久しぶりだった。

朝海と話している間も男子がこっちをニヤニヤ見ているのにたまに気付いた。

そうこうしているうちに担任が教室に入ってきた。

「おまえら席につけ。」

美優と目が合うと担任の細川は目をさつと反らした。

美優もあまり気にせずにその日一日学校ですごした。

放課後、今日は店でバイトの日だから急がなければと急いでクラスを出ようとするとな人のクラスメイトの男子が声をかけてきた。

「美優少し話しあるんだけど…」

クラスメイトの柊だ。

「ごめんね、柊君。今急いでるんだ。急用？」

「いや…明日でいいや。明日また話しかけるよ。」

「解った。ならまた明日。」

美優はそういうと急いでバイトへ向かった。

美優が学校の正門を出ると拓也は急いでいる美優の後を追った。

拓也は今日一日美優を見張っていたのだ。

美優がいつもの公園でドレスに着替えようと、公園のトイレへと向かった。

拓也はなぜ公園のトイレに入った美優を外で待っていた。

「遅いなあ、お姉ちゃん。大丈夫かな？」

拓也がさすがにトイレには長すぎると不安に思い出したころ美優は出てきた。

出てきた美優に驚いた。

拓也の知らないドレス姿の色気を感じる美優がいたのだ。

「お姉ちゃん」

拓也はショックだった。

こんなかつこをするなんて確実に夜の店だと確信した。

拓也はその後も美優の後を追った。

すると一つの店に入って行った。

ここが美優の店なのだ。

拓也は仕事が終わるまで美優を待った。

拓也は美優がビデオ屋で働くと言った時なぜ信じたのか、何故ビデオ屋のバイト位で生活出来ると思ってしまったのか、自分の考えのなさを悔やんだ。

「お姉ちゃんは一人でこんなに耐えてたんだ…」

拓也は涙が止まらなかった。

しばらくすると美優の仕事が終わる時間になった。

美優の

「お疲れ様でした」と言う声が聞こえた。

美優は今日も疲れたとぐったりして店を出て来た。

「お姉ちゃん…」

聞き間違いだと思った。

こんなところに拓也はいない。

しかし目の前にいるのは拓也だった。

「たっくん。なんでいるの?」

「お姉ちゃん最近どんどん痩せてるし、お母さんの治療費…あんな大金いっただいどうやって稼いでるのか不安になって…後を追ったんだよ。」

そう言うとき拓也は涙を流しながら美優に抱き着いた。

美優は戸惑いながら、

「お姉ちゃんね、たっくんに本当の事言ったらもつと不安になるんじゃないかと思って黙ってたんだよ。でもかえって不安にさせたんだね、ごめんね。でも大丈夫だからね」

美優はそう言うとき拓也の頭を撫でた。

「お姉ちゃん…生活…出来なくなるかもしれないけど…ばく全然気にしないよ。だから…嫌ならこんな仕事やめてよ。無理しないで。」

拓也の優しさは嬉しかった。

しかし止めてしまえば母は死んでしまう。そこまでは拓也は考えられていなかった。

「大丈夫よ…。明日も早いし早く帰ろう。コンビニで弁当買って。」

美優はそう言うとき拓也と一緒に家に帰った。

拓也にばれたことは美優は内心ホッとしていた。これからは隠さなくて済むから。

しかしその二人の会話を聞いていた人間がいた。

担任の細川だ。

細川は二人の会話を聞いた後、夜の町へと消えていった。

次の日美優が学校に行くと、細川に職員室に呼ばれた。

美優はこの前の事と思い溜息をつきながら職員室に行った。

「失礼します。」

美優が職員室に入るとこの前とは違い、校長も同席していた。

すると細川は、

「早く座りなさい。」

と美優を誘導した。

美優は戸惑いながら席についた。

少し沈黙が続いた後細川が沈黙をやぶった。

「昨日の夜お前をみたよ。」

美優はドキツとした。

「最近どんどんお前は痩せていくし成績も落ちていっているから不思議には思っていたが、そんなに困っていたんだな。弟にも黙っていたみたいだし。」

美優はどこでばれたのか考えていた。しかしそんなことはもうどうでも良い。

どう対処すれば良いか考えなければ。

美優が黙っていると校長が話したした。

「君が夜のバイトをしていたのにはそれなりの理由がある。しかしそれを無視することは学校側としては無理なんだよ。」

美優はごもつともだと思った。

校長は話しを続けた。

「一週間あげるから、考えなさい。でも学校を続けていきたいなら今の仕事は辞めなさい。」

美優は返事をすると思員室をでた。

美優は悩んでいた。

今のバイトを辞めるとどうなってしまうのか。

考えなくても解っていた。

バイトを辞める訳にはいかない。

高校を辞めよう。

奨学金をとったとしても生活は無理だ。

美優は学校を辞める事を決めた。

教室に戻ると柊が話しかけてきた。

「美優、昨日の話んだけど、今良い？」

正直美優は今人の話を聞きたくもなかった。

けれど約束した事は覚えていた。

「何？」

「いや、ちょっと別のところで良い？」

美優と柊は廊下に行った。

美優は廊下に出る途中でそういえば柊先生と同じ名字だと思っていた。
ていた。

「話して何？」

正直早く教室に帰りたい。

すると柊は緊張した感じで話した。

「俺、美優の事好きなんだ、俺と付き合ってくれないか」

美優は初めて告白されて驚いた。

「ごめんね、私今付き合うとか、あんまり考えられないんだ。」

「お前の家が大変なのはなんとなくだけど解ってるよ、それでも付き合っしてほしいんだ。俺も出来る限り手伝うから。」

「ほんとにごめん。でも私もう学校辞めるし、会えなくなるし、人と付き合うなんて今は考えられない。」

「なんで辞めるの!？」
柊は驚いていた。

「食べていけないからちよつと夜のバイトとかしてたんだけどばれたんだよね。だからもうごめんね。」

美優はみじめな気持ちになった。

なんで最後の最後でこんな思いしなきゃなのよ。

美優は教室に戻って席につくと、朝海が近寄ってきた。

「大丈夫?なんかあった?」

「明日泊まり行っただ時話すね」

美優はそついうと学校を後にした。

そして次の日学校を休み、土方拓也と朝海の家に行った。

「いらっしやい。待ってたよ。」

朝海は笑顔で二人を迎え入れた。

「今日は美優学校休んでたけど用事？」

「母さんのお見舞い行ってたの。」

「そっか」

大勢で食べる食卓なんて久しぶりだった。

この幸せが続けば良いのにとさえ美優は思った。

拓也も優ととても仲良しで楽しそうだった。

夜美優は朝海の部屋にいた。

二人でテレビを見ながら布団に横になっていた。

「泊まりに来た時に話すって言ってたけど。」

朝海が聞いてきた。

「柊君に告白されちゃった。」

朝海は少し沈黙になっていたがすぐに叫びだした。

「凄いじゃん！え、おめでとう！」

朝海の興奮は収まりそうにないので美優は朝海が黙る前に発言した。

「でも断ったから」

朝海は

「え!？」と言つと少しまた黙つた。

「なんで？」

「今忙しいし付き合うなんて考えられないんだ。」

美優がそついうと朝海は

「そつか、そうだね。」

と言ひ、少し残念そうだった。

「でもね、今日言いたかったのはその話じゃないの。」

美優がそついうと朝海は驚いたように、

「これ以上に驚く事があるの?」

と聞いてきた。

「私ね、学校今週いっぱいで辞める事にしたの。」

美優のこの発言に朝海は驚きとショックを覚えた。

それでも今の美優の痩せてしまった体や、目元のくま、生活の苦しさを知ってでは軽はずみには止められなかった。

「そつか、でももし辞めたくないって本当に思うなら私も応援するよ。出来る事はするよ。」

朝海のその言葉が嬉しかった。しかし朝海には真実を伝えて辞めていく本当の理由を理解してほしかった。

そしてこれからも友達でいて欲しかった。

美優は話しはじめた。

「朝海聞いて。」

どうしても生活出来なくて下着を売った事、

晁菜の紹介で水商売をしていること、

そして……体売ったこと………………。。

朝海は泣いていた。泣いて泣いて悔しがっていた。

「私ね、朝海。下着を売った時も、体売った時も悲しくて悔しくてたまらなかった。なんで私だけがこんなに苦しいのって、寝ずに頑張ってるのに、なんで体売らなきゃ食べていけないんだって」

そう言い終わると美優の目にも涙が溢れた。

「でも…学校辞めたら、学費も浮くしその分働けるし、少しは楽になると思っんだ。…だから……………」

美優は言葉に詰まった。

でもこれだけはたしかめたい。

「でも…」

「私達…………私学校辞めちゃうけど…こんな私だけど……………」

美優は母が倒れてから初めて人に助けを求めている。

「友達でいてくれるかな？」

美優はそついうと朝海を見つめた。

朝海も泣き続けていて目元は真っ赤だった。

そして美優を見つめながら…………

「当たり前でしょ！」

そして美優は高校を退学した。

生きていくために。

優等生の崩壊 学校退学（後書き）

次回は凄い展開をかんがえています。

柊（前書き）

お久しぶりです！ーこれからお願いします！ー！

柊

美優が学校を辞めてしまってもう一ヶ月が経とうとしていた。

柊は美優のいた机をじっとみていた。

一時期美優が退学してからというもの美優の噂話で学校中がいつぱいだった。

クラスの男達はクラスいちの美女がいなくなったということもあり、がっかりしていた。

しかし学校は日が流れるごとに美優のいない学校が当たり前となってきた。

そんななか柊だけが美優を思い出には出来ないでいた。

朝海に何度も美優の事を聞いたが朝海は答えようとはしなかった。これ以上美優に悩み事は増やしたくなかったのだ。

柊は美優の机をみながら

「そついえば今日兄貴に来るように言われてたな」

柊は兄との約束を思いだし今日放課後兄のもとへ行くことにした。

その頃美優は昨日遅くまで働いていた事もありまだ寝ていた。

学校を止める事を拓也に話した時は流石に拓也も学校を辞める事を止めたが、今の美優の体をみれば無理はさせられないと思い同意した。

しかし母には言えないと二人で話し、母には今まで通り学校に通っ

ているということにした。

「ん…」

昼前になり美優は目を覚ました。

このところよく寝れるし体調も少しずつではあるが改善されていた。

しかし体重だけはなかなかあがらなかった。

美優はこのところずっと体が怠かった。

今日は仕事が休みである。

風呂に入り、昼ご飯を食べようと炊飯器をあけた時だった。

「ん…！！げげほ」

いきなり美優の体に吐き気を催した。

美優は昼ご飯を食べるのを止めてまた布団に入った。

「少し休んで、病院に行こう。」

今日はお金を支払う日だったのだ。

4時位になったところで美優は起き上がり、準備して部屋をでた。部屋を出て町を歩いていると頭が重くて体がとてもきつかった。

この所美優は元いたスーパーのアルバイトも再開していた。

それでも学校に行ってたころよりは睡眠時間はあるものの寝れない日もあった。

美優は病院に着くかないや笑顔をつくり母のいる病室をノックした。

「はい…」

鬱が激しいのがいつもよりも怠そうな返事が帰ってきた。

ドアをあけ部屋に入った。

「お母さん調子どう？」

母は美優の顔をみるなり微笑んだ。

「美優ちゃん、来てくれたのねえ。ありがとう。」

美優はその後母の変形した手を握りながら他愛のない会話をした。

しかしやはり今日の母は

活気がみられなかった。

すると母が

「美優ちゃん、お母さんはなんでこんな病気になったの？美優ちゃんはいつもお母さんをのけ者にして楽しんでるんでしょ？」

美優にはこれが鬱病からきているものだとかちゃんと解っていた。

それでもやはり辛く、美優は部屋を出た。

部屋を出て柊の部屋をノックした。

扉が開いたので部屋に入ると柊先生は私服に白衣を羽織ってまっていた。

美優が柊の私服姿を不思議そうに見ていると柊が笑顔で美優に話しかけてきた。

「美優ちゃんいらっしやい。」

柊は今美優をみてとてもドキドキしていた。

柊は先月最後に美優に会った日からずっと考えていた。

他の患者のご家族に対する思いと明らかに違う、これはいつたいたいのなのか、

大変な生活を送っているから同情なんではないか。

しかし今美優をみて確信した。

俺はこの子を愛してしまっている。

柊はドキドキした気持ちを押さえながら美優を座るよううながした。

柊は美優をじつとみていた。

また痩せている。顔色もあまりよくない。

美優は柊の目線にも気付かずにお金を柊に渡した。

「先月分です。あの…先生何故私服なんですか。」

「ああ、俺も今日はこれで仕事終わりだから。」

美優は柊先生の姿を見るとほっとした。

柊先生が笑顔で話してくれるということは母に悪化はないと言つことだ。

美優が立ち上がろうとするといきなり目の前が真っ暗になった。

息が出来ない…苦しい。

美優が目を開けると柊先生が美優を腕で支えていた。倒れる美優を

支えたようだ。

息が吸えない苦しい……怖い……美優が涙を貯めながら奮え苦しんでいるといきなり柊先生が抱きしめてきた。

背中をさすりながら、

「大丈夫だ、俺がいる。だからもう頑張るな。」

柊先生の声が心に響いた。

涙が止まらない。美優は男の人の大きな体に抱きしめられて始めて心が落ち着いた。

すうっと吸うことが出来たかと思うとそのまま意識がうすれていった。

その光景をずっとみていた男が柊に話しかけた。

「兄さん」

柊が振り向くとそこには美優と同じクラスの柊がいたのだった

愛と嫉妬（前書き）

またまた久しぶりです。頑張っ
て書いてるけどはたしてみてもらえ
ているのか……不安です。 少
しでも読めるものになってた
ら感想欲しいです。

愛と嫉妬

「修、来てたのか。」

柊先生が返事した。その腕の中で美優が柊の服をギュッと掴んで横たわっている。

修（同じクラス）はムツとした。自分の好きな女が自分の兄の腕の中で寝ているのだ。

「兄貴なにやってんだよ。美優とどういう関係だよ。」

柊は弟の怒っている表情をみて修も美優のことが好きな事に気付いた。

しかし柊もはや美優を他の男に渡したくなかった。実の弟になど1番渡したくない。

「修どうして来た？」

「兄貴がメールで来てくれって言ったんだろ。」

「俺はそんな事言ってない。」

「…親父がまた…俺を騙したのか！」

修が叫んだ。

修は父の病院を継ぎたくなかった。

父は継がせたくてなにかしら修に会いたがっていた。

柊はいつも父と修のあいだでお互いの話を聞かされていた。

「修とりあえずおやじのところに行って来いよ、俺はまだ仕事だし」

「仕事だあ。女抱いてよく言つよ。」

「この子は俺の患者の娘さんだよ。倒れたから支えただけだ。手当てしないといけないから、文句言つ以外に用事がないなら早く出ていけ。」

修は柊を睨んだ。

「兄貴は頭が良いから良いよな」

修は部屋を出ていった。

「ん……………」

美優が柊にしがみついてきた意識はない。

柊は栄養の点滴を持って美優を抱っこし連れて帰った。

病院では若い女の子一人と医師で話すのは疑われやすいため看護師が入るが、柊は二人で話しかかったのだ。

自宅の駐車場に着いて美優の様子をみるがまだ寝ている。

柊は美優を抱っこして家まで運んだ。

家に入ると美優を自分のベッドに寝かせ点滴をした。

そして美優が目を覚ますまで待っているとそのまま眠りについてしまった。

朝になり美優は目を覚ました。

「じじは…」

美優があたりを見回すと柊が近くのソファで寝ている。

美優は昨日の事を思いだした。

「私病院で倒れたんだっけ…」

着信履歴をみるとお店のママから何度も連絡が入っている。

「昨日休みだったはずなのにどうしたんだろう」

柊を見るとよく眠っている为先に電話をすることにした。

「あ、ママ？電話があったからどうしたの？」

美優の電話の声で柊は目を覚ました。

しかし美優は電話しているためまだ話しかけずに待っていた。

「昨日休みだったのに電話がなるなら何か用があると思ったんだけど、…あ、大丈夫です。ちょっと体調崩して寝てたものですから。」

「はい…ママは心配すぎですよ…はい。今夜からまた行きますから。はい心配かけました。ありがとうございます。」

美優が話し終わると柊は美優に話しかけた。

「大丈夫？」

美優は柊をみて助けてくれた事はすぐ解った。

「はい、ありがとうございます。先生ここは？」

「俺の家だよ、ごめんね病院ではもうみんな帰ってたから。」

「そうだったんですか。すいません迷惑かけちゃって。」

美優は申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「嫌良いよ。それよりご飯食べようか。朝ご飯くらい作れるから」

柊はそういつとキッチンへ歩きだした。

「私作りますよ。御礼です」

美優が笑顔でそういつと柊からエプロンを取り自分が着た。

柊は台所での美優の背中をずっと見ていた。

目が離せなかった。

愛してる女が自分の家で自分のために料理をしている。

離したくないと強く思った。

しかし先程の電話を聞いている限り柊が予感してたことは確信に近づいていた。

そんなことさせたくない、今すぐ辞めさせたい。

自分の傍にいてほしい。

他の男に触らせたくない。

柊がそんな事を考えている間に美優は料理を作りあげ柊を呼んだ。

「先生出来ましたよ。」

「あ、ああ。」

柊が食卓に向かうとそこには本当に高校生が作ったのかという立派な和食の朝食が出来ていた。

「朝は洋食派でしたか」

美優が不安そうに尋ねてきた。

「いや、和食好きだよ。」

柊は食卓に座ると手を合わせて食べ始めた。

「うまい。凄く。」

「よかった。私小さい頃から母の代わりしてたから料理はちょっと得意なんですよ。」

柊は美優をみると美優は何一つ口に運んでいなかった。

「美優ちゃんも食べないと。体が持たないよ。」

柊は美優に食べる事を促した。

しかし美優は食べようとはしなかった。

「そろそろ学校の時間だね。美優ちゃん学校まで送るよ。」

柊はスーツを着ながら美優に話しかけた。

しかし美優はソファからなかなか立ち上がろうとしない。

「やつぱりまだキツイかな？ 顔色も悪いし。キツイようだったらゆっくり休んで帰って良いよ。学校も休んで良いから。」

柊が美優の前にかがんで頭を撫でた。

美優は柊といえるこの空間がとても心地良かった。
安心するのだ。

でも早く出ないとスーパーのバイトに遅れてしまう。今日は夜の仕事もある。

頑張らなきゃ頑張らなきゃ。

美優は自分にそう言い聞かせた。

「大丈夫です。私もそろそろ帰らないと、これ以上迷惑もかけられないし。」

美優がそういうと立ち上がり柊にお辞儀した。

「今日はありがとうございました。」

久しぶりに心から寝れた気がした。と心で思った。

「美優ちゃん迷惑なんて思っていないから、もう少し休んでも良いんだよ。」

美優は玄関に向かって歩いた。

するといきなり胸が締め付けられたような苦しさが現れた。

美優は廊下に倒れた。

昨日と同じ…

怖い……

息苦しい……

空気を吸えない……

助けて……

美優が朦朧とした意識の中で酸素がいきなり入ってきた。

涙を沢山溜めた目を開けると柊が美優の口にキスをし酸素を入れて

いた。

美優が少しずつ自分の口で空気が吸えるようになった時、柊は美優を抱きしめた。

男の大きな肩にだかれ美優は全ての恐怖がその一瞬消え去った。

そして柊は美優に言った。

「君を守りたい。」

「君が好きだ。」

美優は力の入らない体でその言葉を聞き、驚いていた。
驚いてただ柊に抱きしめられていた。

気がつくともた柊のベッドの上だった。違ったのは柊が美優の手を握っていたことだった。

美優は柊に言われた事を思いだした。

胸がドキドキする。

しかし柊は一回りは年が離れているはずだ。

美優は何も考えられず混乱していた。

ふと時計をみると10時を過ぎていた。

「大変！行かなきゃ遅刻しちゃう」

美優が慌てて急いでいると柊が腕を引っ張りベッドに戻した。

「美優ちゃん今日は学校は無理だよ。休みなさい。」

「でも…でも行かないと…クビにされたら困るし。」

美優は柊の腕を振りほどこうとしながら言った。

「クビ？」

柊が美優に尋ねた。

美優は困った顔で俯いている。

ついできてしまった言葉にどう対応したら良いか焦っていた。

「美優ちゃん、クビって…バイトのこと？でもこの時間は学校の時間だね？」

美優は返事をしなかった。

柊は美優の返事を待った。

すると美優は小さな声で言った。

「学校辞めたんで」

柊は言葉を失った。

愛と裏切り〜孤独の始まり〜（前書き）

連続で書きました！！

愛と裏切り―孤独の始まり―

美優の発言に柊は言葉を失った。

「学校辞めたって美優ちゃん…まさか本当に。」

美優は俯いたまま頷いた。

「今は学校辞めてスーパーでバイトしてます。バイト行かないと生活出来ないから…だから行かないきゃ。」

美優が柊の腕を振りほどくと玄関へ向かった。

すると後ろから柊が美優の腕をつかんだ。

「俺が美優ちゃんを好きと言った事に嘘はないよ。お願いだからもうそんなに頑張らないでくれ。俺に頼ってくれないか」

美優は俯いている。

「私には弟がいるんです。私がしっかりしないとたつくんは不安になります。」

「君のその痩せた体の姿を見る方が弟さんは不安で辛いんじゃないかな」

美優は俯いて涙をためている。

「それに、頼むから夜の仕事なんて辞めてほしい。俺は他の男に君を触らせたく……」

「……………じゃない」

柊が言い終わらないうちに美優が何か言った。

しかし声が小さく聞き取れなかった。

「美優ちゃん？」

柊が美優に尋ねた。

「男は喜ぶじゃない!!」

美優の声が響いた。

「始めてお金に困った時パンツを売った。それでも足りなくて写真も売った。

……………処女も売った。

でも嫌だった、辛かった。

友達に体を売った事がばれて恥ずかしかった。

……………そしたら友達が体を売らなくても稼げる場所を教えてください。夜の店は体を自体を売らないもの。ママもみんな親切だし、私の事を守ってくれる。でも今まで私がやってきた仕事は全部男相手だもん。男は喜ぶじゃない。先生だってそういうお店行くんでしょ、好きなんですよ。だったら辞めるなんて言わないで。私にはここですら生きて行けないんだから。」

美優は泣きながら柊の部屋を飛び出した。

柊は自分を悔やんだ。

「くそっ」

夜の店に手を出していた事はなんとなく気付いていた。辞めさせてくたさなかった。

それがパンツを売り、身体を売ったなんて。

柊は気付かなかった自分を悔やんだ。

美優が道路を走っているのを家からただ見つめていた。

あれから一月が過ぎた。

美優はまだ仕事を続けていた。

今日は柊先生に会って今月分の支払いと母の状況を聞く日だった。

行きたくなかった。しかしあの病院へ支払いに行くのも今日が最後であった。

母はもう入院期間が過ぎてしまったためもう病院には入れないのだ。

今日は今後の事を話し合う日でもあった。

柊はこの一ヶ月何度も美優に連絡を入れていた。

辞めさせたいと言う気持ちもあったが体調が気になっていたのだ。

しかし美優は柊の元へは行こうとはせず、今日はあの日以来の再会だった。

美優は病院に着くと待ち合い室のソファに座った。

「息苦しい……」

美優がそう思ってソファに座って休んでいると柊が近寄ってきた。

美優が気まずそうに座っていると柊は横に座った。

「部屋に行こうとしたら美優ちゃんが見えたから」

また……痩せたな。

柊が心配そうに美優をみていると、美優が下を向いたまま話した。

「この前は……すみませんでした。心配してくださってたのに。」

美優は頭を下げた。

「仕事はまだやってるの？」

柊がそう言つと美優は頷いた。

「美優ちゃんがこの前、男の人は嬉しいんですよ。って言った通り俺もそういう店に行ったことあるし、嫌な気持ちはしない。けど自分の好きな女が働いてるっていうのは我が儘だけど嫌なんだ。他の男なんか相手にして欲しくないんだ。」

美優は俯いたまま黙っていた。

「美優ちゃんは俺の事好きにはなれない？」

美優はいきなりの質問に戸惑った。

柊が嫌な訳ではない。

ただいきなり過ぎて頭は混乱していた。

「返事は待つから、でももし君も俺を好きになってくれたなら俺は君と君の家族を守るよ。」

「先に部屋で待ってるね。」

柊は美優を残して去って行った。

美優は嬉しかった。

美優を助けると言ってくれる人がこの世にいたことが嬉しかった。
しかし美優に男を好きになることが出来るのか。

美優は柊の待つ部屋へと向かった。

部屋に入ると看護婦さんと柊がいた。

美優は看護婦に今月分の治療費を支払った。

看護婦はじつと美優を美優を見つめていた。

初めて美優に会った時の少女らしさが何処にもなかった。

世の中の汚い者を知ってしまったような、もうこの世になんの希望も持っていないという目をしているように看護婦にはみえた。
美優は柊を見た。

柊は美優の目線に気付き美優に笑顔を向けた。

そして柊は美優の母の病状を語りだした。

「今のお母さんの状況から言うと、リウマチはかなり進行しています。入院のきつかけになった膝の骨折は治ったけれど関節が引っ付いてしまっているから曲がらなくなってます。また他の関節もかたまっってしまったていて座るのも難しくなっています。今までの生活は難しいと思います。」

美優は分かっていたことなのでただ話を聞いていた。

「それで今回は入院期間が過ぎてしまったため今後の事を考えて行きたいと思っています。」

すると看護婦がいくつかのパンフレットを差し出してきた。

「今後はねホームヘルパーと訪問看護を頼んで自宅療養か施設に入所するかの選択になります。どちらが金銭面的に安いかなどと自宅療養だけとその分ケアが必要になるから自分の時間で言うものがなくなると思います。でもデイサービスとかに学校の間はあなたが帰るまでいてもらったりは可能だから、家でみることも大丈夫だと思いますよ。」

美優は看護婦の話を聞いた後話しだした。

「母は施設に入れようと思っています。母の面倒を見ていると働きに行く時間が無くなってしまいます。それこそ暮らしていけないから。」

看護婦と柊はてっきり美優は自宅療養を希望すると思っていたため驚いた。

そして自宅療養だと今までの半額で済む事も伝えた。施設となると今ほとんど変わらない値段支払わなければならない事も伝えた。

しかし美優は母の面倒をみているとその半額も難しいと伝えた。

そして、一人言のように

「母さんをみてあげたいけど、私の身体がもたない」

と聞こえた。

そして今後入る施設も決まり、母に説明する事になった。

母に説明するのに柊と看護婦は付き合ってくれることになった。

「お母さん」

美優が笑顔で母の元へ行った。

「美優ちゃん。お母さんやっとな家に帰れるのね。また三人で暮らせるのね。」

母は自分が自宅に帰るのだと思っていた。

「お母さん、あのね。」

美優は母に施設に入所してもらったことを伝えた。

母の顔色がだんだん青くなるのが分かった。そして話しが終わったあと美優が立ち上がるうとすると母がいきなり後ろから紙屑をなげてきた。

「親不孝者……」

美優は言葉を疑った。

「親不孝者！あんたなんか引き取るんじゃないわ。お父さんが浮気して出来た子供よ。私はリウマチが酷くなるから介護が将来必要になる。自分の子供に迷惑かけたくないから美優に面倒見させようと思って引き取ったのよ。なのに施設に入れたなんて、もっと身体を売ってでも稼ぎなさいよ。」

「え……」

「あなたは私の子なんかじゃないわ。お父さんが浮気して出来た子供よ。私はリウマチが酷くなるから介護が将来必要になる。自分の子供に迷惑かけたくないから美優に面倒見させようと思って引き取ったのよ。なのに施設に入れたなんて、もっと身体を売ってでも稼ぎなさいよ。」

美優は呆然と立ち尽くしていた。

「もういいわよ、ここにこなくて。あなたが身体売ってくれたお金で暮らした方が裕福に暮らせると思ってここにいただけなんだから。実家でたくや連れて帰って暮らすわ。」

母はさっきまでのうつのような症状は消え去っていた。

「実家なんてないって言ったじゃない。頼るところもないって。」

美優が言くと母はにこやかに話した。

「若い頃から発病しててなにもしてないわけじゃない。」

美優は呆然と母を見つめていた。そして病室を飛び出した。

看護婦は今の会話が信じられず立ち尽くしていた。

柊も信じられなかったが美優を追いかけて病室を出た。

「美優ちゃん！」

柊は美優を追いかけてやっと捕まえた。

美優は真っ青になってただ啞然としていて身体は震えていた。

柊は美優を強く抱きしめた。

「もう君がなんと言おうと離さない。君は俺が守る。俺と一緒にいよう。」

柊に抱きしめられ美優は啞然としたなかで柊の背中に腕を回した。

そして泣き叫んだのだった。

支え（前書き）

短いですが区切りが良いので

支え

美優はどの位柊の胸の中で泣いていただろう。

美優が泣き止んで柊の胸から顔を離れた時には美優の目は真っ赤にはれていた。

美優は泣き止んでから何を言えば良いか解からずただ黙っていると柊が話した。

「今日は仕事は？」

美優が首を横に振ると、柊は美優の手を握り美優を連れて歩きだした。

美優が啞然と柊に引っ張られていると、

「今日は何もないんなら俺に付き合ってよ。」

「先生…仕事は…」

「今日はもともと君との話し合いしか仕事入れてなかったから」

柊は車に美優を乗せて走り出した。

美優は夕焼けの街をただ見つめていた。

夜の店に向かう女性もいた。

あの人達も誰かの為に働いてるのかな……

そう思うと美優は涙が止まらなかった。

自分の支えにしていた家族が偽物だった。

その支えを無くして学校を辞めて友人も少なくなった中で何を支えに生きれば良いのだろうか。

美優が泣いている間に車が止まった。

「着いたよ。」

柊のその言葉に美優は顔をあげると自分の家が目の前にあった。

美優はこの状況でたつくんに会いたくなかった。

そしてもう母との思いでの強いこの家で過ごしたくなかった。

美優はなかなか車から降りる事が出来なかった。

柊から離れたくなかった。

でもこの感情が柊の事を好きとは違う気がした。

まだ好きなのか解らなかった。

男と仕事以外で交えた事のない美優にとって男は恐い存在だった。

美優が黙って座っていると柊が話したした。

「弟と話してきなさい。待ってたあげるから。」

美優が柊を見つめた。

「弟さんとちゃんと話して、自分の荷物持っておいで、一緒に暮らそう。俺と一緒に生きていこう。」

美優は涙が止まらなかった。

そして正直に今の気持ちを話した。

「私は男の人を好きになつた事がないから…それを知らないまま仕事で男の人と関わってきたから…男の人が恐いです。でも柊先生に好きって言われて嬉しかった。今も離れたくないって思いました。でも自分の気持ちがわからないんです。」

美優はそう涙を沢山ためて柊に訴えた。

「人として俺のことどうおもう。」

柊のその質問に美優は涙を流しながら答えた。

「好きです…っ」

柊は美優を抱きしめた。

「それで十分だよ。たとえ身体を交える事が出来なくても君が俺を好きならそれで良い。一緒に暮らそう。」

美優は柊の大きな胸に抱きしめられて思った。

私は一人じゃない。

この世の中に私の居場所がここにあった。

美優は新たな支えを見つけたのだった。

ドミノ（前書き）

もつそろそろ完結させるつもりです。まだまだ掛かりますがみてく
てくださいね。

ドミノ

美優はたくやに真実を話した。

たくやは泣きながら美優に謝った。

そして一緒に暮らす事を頼んだ。

けれど美優にはもう支えてあげる勇気がなかった。

「ごめんねたっくん。もう一緒には暮らせないの。でも何処にいても私達は兄弟だから。」

美優はそう言い家を後にした。

柊は美優に仕事を辞めて学校に再び行かないかと進めた。

しかし美優は学校にはもう戻りたくないと言った。

そして夜の仕事をすぐに辞めるのはママに迷惑をかけるからと柊に後3ヶ月は続ける事を伝えた。

そしてそのあと自分のやりたいことを探すことにした。

美優は柊と暮らす事になって柊の事を徐々に理解していった。

柊は自分を本気で愛してくれている。

その愛に裏はなく無償の愛を美優は今初めて感じていた。

そして美優もまた柊を愛しはじめていた。
そんな時だった。

美優がまたいつものように夜の店に行こうとした時だった。

美優がドレスを着て化粧をし、髪をあげて準備をしているとまた目眩がきたのだ。

美優はふらふらしながら壁にもたれかかった。

そしてだんだん呼吸がしずらくなって美優は意識を失った。

その時ママやあきなは美優が来ない事を心配しだしていた。

「あの子が連絡もなしにこんなに来ないなんて今までなかったわよね。」

ママが不安そうに言った。

ママは美優の今の現状を全て知っていた。

そしてもうすぐ仕事を辞めることも知っていた。

「あきな、美優ちゃん電話でない？」

ママのその質問にあきなは首を横にふる。

「あの子最近痩せてきてたし、たまに立ちくらみみたいなのあったみたいだから心配だわ。」

ママは心配そうにどうすべきが悩んだ。

「あの女優と一緒に暮らしている人の病院何処だったかしら。」

ママは柊の病院に電話し柊を呼ぶと柊が電話に出た。

「もしもし、電話代わりました。柊です。」

ねえ、先生………

もし人生やり直す事が出来るなら先生は何処からやり直したい？

私は…母が倒れる前。

そしたらあなたにもつと甘えられたから……………

……………。

積み木

美優が目を覚ますと、柊のパジャマを着てベッドに横になっていた。頭が重く、体中が怠く、やはり少し息苦しくて不安で恐くて美優は柊を探すも寝室には誰にもいなかった。

美優はふと時計をみると9時であった。

9時…朝かな…でも今日着替えて出掛けようとしていたような…

美優は頭がうまく回転せず携帯を見ると21時とされるされていた。

「大変、仕事行かなきゃ」

美優が慌てて立ち上がろうとすると視界がくるくる回りふらついてうまく歩けなかった。

次第に息苦しさも伴いどうにか部屋を出ると、柊がいた。

美優はホッとして柊のところへ行こうとすると柊が美優に気がついて、不安そうに近寄ってきた。

「美優横になってないよ。」

そついい柊が美優を抱っこする。

「でも仕事今日さぼっちゃったことママにあやまらなきゃ…」

美優は不安そうに言った。

母とああいうことがあってからというものの美優は人に嫌われることを偉く恐れるようになっていた。

学校を辞め、友人が減り、母に裏切られたことなどで一人ぼっちになることを恐れていたのだ。

「大丈夫だよ、俺が変わりに理由を説明したから」

柊は笑顔でそういうと美優をベッドに寝かせた。

そして柊が離れようとすると思優が柊のうでをつかんだ。

「私…へんなんです。たつと目眩がするし、食べ物も食べたくなくて、息苦しくなるときもあるんです。」

柊は美優の傍に腰掛けた。

「美優ちゃん、病院に行こう。」

柊がそう言つと美優は嫌と首を横にふった。

「怖い…」

美優が涙目になって柊を見つめた。

柊は美優手を握った。

「大丈夫、俺も一緒に行くから。」

「先生がみてくれないの？」

「多分俺の専門外だから。明日一緒に行こうな。」

美優が頷くと柊は部屋を出ようと立ち上がった。

美優はすぐに柊の袖を掴んだ。

「今日……一緒に寝たら駄目ですか？」

柊は驚いた。

美優も言っただけ戸惑っている。

今まで一緒に暮らしはじめてからというもの、美優が男を恐れていることから一緒に布団で寝た事は一度もなかった。

柊自信も美優と一緒に寝ると自分の欲求を抑えられず襲ってしまう事を恐れて極力密着しないようにしていた。

しかし美優は不安でいっぱい誰か傍にいてほしかったと言う気持ちに確かにあったが誰でも良かった訳ではない。

美優は少しずつ柊を男としても愛しはじめていた。

「駄目……ですか……やっぱりなにもなしでは……」

美優が不安そうに柊を見つめていた。

「いや、嬉しいよ。一緒に寝ようか。」

柊は嬉しかった。手はだせないためそのてんは辛いけど、美優が男と

しての柊を少しづつ好きになりだした証拠だからである。

その夜柊が布団に入ると美優がどうしたらいいのか解らずベッドの隅で反対を向いていた。

そして少し肩を震わせ、二人の布団の間に冷たい風が入ってきていた。

柊が美優の肩に手をおくと美優がびくつと体を震わせた。

「美優ちゃんこっちおいで。そんな隅にいたら寒いし落ちちやうよ。」

柊がそういつと美優は震えながら返事はしたもののなかなか来なかった。

柊は美優を自分側に寄せ背中から抱き寄せ、自分の腕に美優の頭をのせた。

「おやすみ」

柊はそういつと抱きしめたまま電気をけした。

美優はどきどきがとまらずにいた。しかしとても居心地はよく、沢山の恐怖が嘘のように消えていた。

背中に伝わる柊の温もり、自分のお腹を抱きしめている大きな手、その全てが大好きだった。

美優は体をくるっと回し、柊の胸に顔を埋め、そして柊の胸元の服

を握った。

柊の心臓の音がした。
とても安心する音がする。

「先生……ありがとうございます。とてもホッとする。」

「美優ちゃんそろそろ先生って止めない？」

「……でもなんて呼んだらいいんですか？」

「名前でいいよ、孝雄って呼んで。」

「孝雄さん……」

「そうそう。おやすみ美優。」

「おやすみなさい。孝雄さん。」

二人は抱きしめあい、深い眠りについたのだった。

明日が来なければと願いながら。次の日先に目をさましたのは柊だった。

美優は自分の腕のなかにすっぽりとうまり眠っている。

柊は美優を起こさないように離れ、寝室を出た。

そして電話をした。

『はい、荒山精神科病院です。』

「荒山か、久しぶり柊だけど。」

『柊かあ、久しぶりだなあ。元気にやってんのか？』

「ああ、今日ちょっと頼みがあつて電話したんだけど。」

『おう、どうした？』

「ちょっと診て欲しい子がいるんだ。」

『症状は？』

「ここ何ヶ月で笑顔がまず少なくなつて、食欲もないみたいでどんどん痩せていつてるんだ。目眩と呼吸困難も度々あるし。でこの数カ月の間に彼女の回りの環境はがらりと変わってしまったているし、後疲労がかなり蓄積されている。精神的にショックな事も沢山あったんだ。」

『解つた。確かに俺の専門の可能性あるな。今日連れて来いよ。』

「ああ行くよ。頼むな。」

柊が寝室に入ると美優が起きていた。

「起きてたの？」

柊が美優に近づき、ベッドに腰掛けると美優が抱き着いてきた。

「きつい？」

柊が美優の頭を撫でながら聞くと美優は頷いた。

「怠いの」

「今から病院に出掛けるけど準備出来そう？」

柊が聞くと美優はゆっくり起き上がり、頷いた。

「じゃあ準備出来たら呼んで。」

柊は部屋を出た。

美優は重い体を起こし、風呂場へと行った。

パジャマを脱ぐと痩せこけた体が目の前にあった。

「こんなに痩せてたっけ……」

お風呂に浸かり、体を洗い、脱衣所でワンピースを着ようとすると、自分の服なのに大きくて自分が痩せこけてしまったことを強調させた。

美優は服を着ると柊の元へ行った。

息苦しく少し目眩がしていた。

柊が美優を支え車に乗せ走りだした。

「診てもらっただけだから心配要らないよ。」

柊はそう言ってくれたが美優は不安でいっぱいだった。

いくらか車を走らせたところで車が止まった。

そこには荒山精神科病院と書いてあった。

美優は驚いた。

「え……………」

美優は普通の病院へ連れていかれると思っていた。

自分は精神病なのか……

美優は不安になりはじめていた。

柊は何も話そうとはしなかった。混乱している美優に何と声をかけたら良いか悩んでいたのだ。

しかし昨日柊が言っていた

「多分俺の専門外だから」と言う言葉だけが頭をよぎっていたのだ。

積み木（後書き）

沢山読んでくれてありがとうございます。

身体の崩壊、心の破壊

美優と柊は病院の待ち合い室で待っていると荒山が近づいてきた。

「柊、久しぶりだなあ」

「荒山、いきなり悪かったな。」

二人は懐かしむように少しの間話しをしていた。

美優はソファーに腰掛け外の景色を見ていた。

芝生が広がり、患者達がひなぼっこしたり絵を書いていたりと好きなように過ごされていた。

「うるさいー!!」

美優はこの声に驚いて声の聞こえた方を見た。

すると患者が暴れているのを看護師がなだめていた。

「私はね、見えたの。この病院は虫があんなに沢山いるのに放置して私にあそこにいると言うの?!」

「落ち着いてください。もう虫はいませんから。」

「昨日もそういったじゃない。あゝ嫌ゝこんなところ!誰かゝ助けてゝこの看護婦に殺されるゝ!この人は裏切り者よ。裏切り者ゝ!!」

『あんだなんか引き取るんじゃない。裏切り者。』

美優は何処からか母のあの時の声がしたような気がした。

「あ…」

美優は思い出したかのように涙がぼろぼろ流れ落ち出した。そして体が奮え息苦しさを感じ出した。

柊がその姿に気付き美優の傍に行った。

「美優？」

柊は美優の肩に手を置いて美優を自分の方に向かせた。

「お母さんが…裏切り者って…私…裏切り者って」

「美優、ここにお母さんはいないよ。」

「でも…でも…聞こえ…た…。ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「美優」

柊が美優の発言を止めた。

美優はびくつとし、首を横に振りだした。

「嫌…嫌…孝雄さん…先生は美優を嫌いにならないで…怒らないで…」

美優はうわーと泣き出した。

柊は美優を抱きしめて抱っこした。

「嫌いになんかならないよ。大好きだよ傍にいるから。」

柊は美優をなだめながら荒山の元へ戻った。

「フラッシュバックだな…」

荒山が柊に言っていると柊が頷いた。

「さっきの錯乱してた患者いたろ？あの方の発言美優母親に言われてるんだ。」

柊が荒山に説明すると、

「とりあえず診察室に行こう。」

荒山は二人を連れて診察室へ移動した。

そして診察を始める時は柊には部屋を出てもらい、横の部屋からビデオをとって診てもらった事になった。

美優は大分落ち着きをもどし、荒山を見つめた。

「先生は…?」

「先生は隣の部屋で待ってるよ。大丈夫ちゃんと君の事を待ってる

からね。」

そういつと美優は少し落ち着きを戻した。

「さつき、恐かったみたいだね。もう大丈夫？」

荒山のその言葉に対し美優は話し始めた。

「先生がぎゅってしてくれたから…大丈夫…」

そういいながら自分の腕を絡めて小さくなっている。

まるで自分で自分をなだめようとしているようだった。

「美優ちゃん、僕はね柊の昔からの友達なんだよ」

そういつと美優は荒山を見つめた。

「友達…？」

「そう、友達。だから僕の事恐がらなくていいよ」

「はい。」

荒山は美優を見つめた。

細いな…そしてほんとに綺麗な子だ…こりゃ柊が好きになる。

「美優ちゃん、じゃあね最近美優ちゃんに起きた出来事を言ってもらって良い？」

「最近どんどん痩せてきていて、目眩もするし…」

美優が話したすと荒山は止めた。

「そうじゃなくて、そうだな。お母さんが入院する少し前から今にかけてを詳しく話してもらおうかな。」

美優は小さく奮えだした。

「話し…たく…ないです。」

美優は俯いてしまった。

「少しずつで良いんだよ。僕はね、美優ちゃんを助けたいんだ。だから僕に教えてくれないかな？」

美優は荒山を見つめ、奮えながら話した。

母がリウマチであることからパンツを売り、処女を売り、お金に苦しみ続けた事など、そして母との最後の関わりまで全てを伝えた。

「お母さんに最後に…お母さんの子じゃ…ないって裏切り者って…」

言い終わると美優は俯いてしまった。

するとぼそぼそと声が聞こえだしよく耳を傾けると

「一人ぼっちは嫌。恐い、助けて。」と言いつづけていた。

荒山は美優を看護師に任せ柊の待つ部屋へ行った。

「どうだ？」

柊は不安そうに荒山をみた。

すると荒山の目から一筋の涙が落ちた。

「悪い… ちょっと… 残酷すぎだよあれは…。」

荒山はショックを隠せないようだった。

あんなにまだ少女なのに…

「荒山… 美優は治るか？」

柊が不安そうに荒山に聞いた。

「お前なら大体もう解ってるだろ。」

柊はその言葉に黙ってしまった。

荒山が話したした。

「美優ちゃんの今の症状の原因は大きく分けて二つだ。まず学校とかを辞めて友達が減ったこと、男が怖いと言うことから外になかなかでれないためからの孤独の恐怖。もうひとつがお母さんからの裏切りによる、人間不審の恐怖」

柊が頷く。

「精神的なものだ。…嬉しい事をずっと覚えているのと同じなように怖いものも忘れない。美優ちゃんのトラウマになっている恐怖を受け入れさせなければいけない。」

「そうだな…。」

柊が返事をすると言いにくそうに荒山が続けた。

「ただ…美優の恐怖はちょっと慣れさせるのは難しいかもしれない…、とりあえず治療はしていこう。まずは体力戻していかないと。入院の手続きをしよう。」

「よろしく頼むな…」

柊は美優のいる部屋へと行った。

柊が入って来るのが見えると美優は柊の元へと来て抱き着いた。

「美優、少し入院して、体力取り戻そう。」

すると美優は嫌そうに柊に尋ねてきた。

「お家では無理なのですか？」

「どんどん痩せてきているし、やっぱり食べれるようにも治療していかないと、それにこのままだと美優が辛い思いするよ。」

「やっぱり私は精神病なんですか？」

柊が黙っていると、

「お母さんとは血も何も繋がってないのに、どうして似っちゃったの。」

柊はただ美優の頭を撫でてあげることしか出来なかった。

「毎日会いに来るから、それに美優が元気になって帰って来れるように待ってるからね。」

美優は頷き、柊にしがみついて泣いた。

そして柊が帰る時美優は柊の後ろをただじっとみていた。

そして病室から柊が外を歩く姿が見えた。

そこには雪が静かに降り落ち、去年の母が倒れ、入院した時と同じ景色があった。

「あれから一年たったんだ…」

美優がただ柊を見つめていると何故か去年の自分と重なりあった。

去年のあの絶望感に溢れたあの姿と柊が重なり、まるで別の視点で自分を見ているようだった。

「先生も辛いんだ…」

美優はそう思うと涙が溢れてきた。

「雪の降る季節なんて大っ嫌い」

そう小さく言つと美優は布団に潜りこみ涙を流すのだった。

身体の崩壊、心の破壊（後書き）

実際に精神病院には行ったことあるのではない人達よりは繊細に書けた気がします。でも全てがああいう人達ではないというのは理解してくださいね。

嫉妬と執着

美優は入院してから一ヶ月がたっていた。

入院費は柊が払ってくれるとは言っていたものの悪い気がして悩んでいた。

治療は言つと少しずつ食べる量を増やして、食事を口から取れるように練習していた。

後はメンタル面を強くするために、いろいろな人との会話の場や自分の過去を受け止めさせるために毎日のように思いだし発言させられていた。

柊はというとほぼ毎日仕事帰りに来ていた。

たまに一緒に病院に泊まることもあった。

そんな時だった。

美優がぼーっと窓から外を見ていると病室のドアがノックされた。

「はい…」

ドアがあくとそこには明奈とママがいた。

「美優」

「ママと明奈来てくれたの？」

美優は嬉しかった。

「はい美優ちゃんお見舞い」

ママが渡してくれたのは花束だった。そしてそのなかには鍵が入っている。

その鍵には見覚えがあった。

「ママこれ…」

それは店の鍵だった。

「もうあの店は美優ちゃんの家みたいなもんなんだから、いつでもいらっしやい。」

ママのその優しい言葉が嬉しくて美優は泣いてしまった。

そしていくらかの時間三人で話しをしていると明奈が美優に話しかけはじめた。

「美優： あんた同じクラスだった柊修覚えてない？」

美優はいきなり話しが変わったので驚いた。

「覚えてるよ。先生の弟さんだし、告白されたし。」

「あんた断ったよね？」

「うん…一年位前にしつかり断ったけど…どうして？」

「なんかあさみからの伝言なんだけど、修がまだ美優の事好きみたいで、最近凄い勢いで美優の事搜してるみたいなんよ。私の店の前まで来てたこともたびたびあったし。気をつけてね…」

「うん…ありがとう。大丈夫だよ病院にいるんだし、柊が悪い人だったとは思わないし。」

「まあそうなんだけど…一応ね。」

「ありがとう。」

その後いくらか話しをし二人はしばらくしてから帰って行った。

美優は修の事を思っていた。

確かあの頃はちょうど仕事と学校が両立出来なくて学校をやめようと決めた頃だった。

修に告白されて付き合うなんて余裕もなくてすぐに断ったのだった。

そして今の美優は男が苦手で、やっと心許してるのが数人いるかの状態なのに、好きとか言われても恐く思うだけであった。

柊が来るのを待つて、相談することにしたのだった。

その頃修は柊の病院にいた。

柊の部屋に向かい、ドアを開けると柊が机にむかって何か作業をしていた。

「修、お前どうしたんだ。」

「とぼけんなよ、美優何処にいんだよ！一緒に暮らしてるのは解ってんだぞ。」

「修、俺達はもう付き合ってるんだよ。美優は渡さない。」

「そんなこと関係ねえよ。俺は美優が好きなんだ。美優が欲しい。」

「修…頼むからやめてくれ。」

「兄貴は良いよな、頭も良いし顔も良いし。親からはうるさく言われないし。一つ位俺にも分けるよ。」

「美優はもうお前の知ってる美優じゃないぞ」

修はふと柊の机をみるとそこには美優の入院している病院からの封筒があった。

その中には入院領収書と美優の名前が書かれていた。

「とりあえず美優の事諦めねえからな」

修はそう言つと部屋を後にした。

そして美優の病院に向かった。

柊は机に座りため息をはいた。

柊は美優を家に連れて帰るかを悩んでいた。

もうどうにか食事は出来るようになったし、病院にいることを美優がとても嫌がるのだった。

「どうしたもんか…」

柊はそういつとタバコに火をつけた。

美優は早く柊に会いたくて時計を見たり、窓から外をみて柊を捜したりと落ち着きを無くしていた。

今日は美優も体調がよく、台所を病院に借りて柊に弁当を作ったのだ。

そして今日明菜から聞いた事を伝えたかったのだ。

「柊先生まだかな」

すると病室をノックする音が聞こえた。

「はい」

「美優ちゃんお見舞いのかたよ。」

看護婦がそう言いドアを開けた。

美優はやつと柵が来たと思い跳び起きた。

「先生。待ってまし……」

美優は言葉が止まった。

そして小刻みに体が震えだした。

「久しぶり……美優……」

ねえ、先生。

もしあの時先生が先に着いてたら私の人生、どうなっただと思う……。

私は何度も考えたんだ……。

でも考えるたび答えは変わらなかった。

恐怖

美優は体の奮えが止まらなかった。

一歩一歩部屋の奥へと後ずさりする。

看護師はもう出て行ってしまった。

「いや…や…っ」

美優が目には涙を溜めて部屋の1番奥の壁によつ掛かった。
そして腰がぬけ、床に崩れ落ちた。

「美優… やつと見つけた…」

修が美優に近づいて来た。

「嫌… 来ないで。なんで柊…ここに来たの…」

美優は修から逃げようと慌ててナースコールをおそうとした。

すると凄い勢いで修がナースコールを奪いとった。

そして美優をおもいつき引きつ張りたいた。

美優は床に倒れこんだ。

「う…いた…い」

修は美優の体をまたいで美優の股間に腰を落とし美優の顔を掌で挟んだ。

美優はがたと奮え目からは沢山の涙を流していた。

修のぺ。スが美優の股間にあたっている。

美優には恐怖でしかなかった。

「や…離れて…」

美優が少し体を動かそうとすると修は美優の顔をしっかりと掴んだ。

美優はがたと奮え、恐怖はどんどん強くなっていった。

「どうしてこんなに怖がるんだよ。俺はこんなに愛してるのに…。
美優…俺にお前をくれよ。」

修はそういつと美優にまたがったまま抱きしめた。

すると修の耳元で何か美優が小さな声を出していた。

「孝雄さん…先生…助けて…。怖い」

修は美優の頬をひっぱたいた。

「お前まで俺より兄貴を選ぶのかよ。」

美優は涙を沢山ためて奮えていた。

修はそんな美優の姿をみているとだんだん悔しさと悲しさが募ってきて、

気付いた時には美優にキスをしていたのだった。

「……っ……やだ……ふ……」

修の舌が美優の口の中で動き回り美優は必死で逃げようとし、修の舌を噛んだ。

「いたっ……」

修が美優から離れた所で美優は急いで修から離れて携帯を持って窓際に行った。

「こいつ……っ」

修が美優に殴りかかろうとした時美優が叫んだ。

「来ないで。こ…これ以上近寄ってきたら警察に言うから…」

美優がやつとのおもいで伝えたら、修は笑いだした。

「言いたきゃ言えよ。ただし兄貴にも迷惑かけるぞ。実の弟が女犯したなんて、仕事クビにならないわけないし。」

美優が絶望に奮えていると修が近寄ってきて美優から携帯を取り、抱きしめた。

そして耳元で小さく囁いた。

「お前はただ俺に大人しく抱かれたら良いんだよ。」

美優は奮えが止まらなかった。

修は美優の耳元を舐めたり足元に手を回したりと美優の体を触っていた。

「美優…美優…」

「い…や…っ…やあ…」

美優が奮えながら外の窓をみるとそこにはいつものように柊孝雄が美優の所へ来ようとしていた。

「先生…助け…て」

柊はいつもより少し遅くなったので今日は美優の病室に泊まること思っていた。

病院の玄関を歩いていると、

「美優！」

その叫び声に美優の病室の窓をみるとそこには、修が窓の下を除き

込み奮えながらさげんでいた。

柊は体が奮えだすのが解った。

「美優……」

柊は美優の病室下へと走った。

そこには人だかりが出来ていた。

『早く医者呼んできて』

『自分から飛び降りたのよ、もうびっくりした』

『もしもし解りますか』

『呼吸はしてるわ、はやく処置しないと、』

『出血が激しいわ』

いろいろな言葉が飛び交う中、柊は人だかりをくぐりぬけ美優みた。

そこには涙を沢山ためて美優が赤い水溜まりの上に横たわっていた。

「美優……」

「美優……!!」

孝雄は美優を抱きしめて、そして抱き抱えて手術室へと連れていったのだった。

なあ美優……………

俺はあの日を今でも忘れられないんだ。

辛くて悲しくていまでもうなされるよ。

もしあの時俺が修に美優の居場所を見せなかったら…

もし修より先にお前のところに行ってたら…

俺は弟とお前の人生を壊さないですんだのかな…

なあ美優お前に会いたいよ…

お前を抱きしめたいよ…

後悔

「あ…美優…」

修は病室の窓から柵が美優を抱えて病院内へ走って行く姿をただじっとみていた。

そして自分のしてしまったことを今やつと冷静に考えれた。

美優が学校を辞めてからというもの、美優の苦労を理解するもなく、ただ自分の欲求を満たすために美優を求め続けた。

自分の好きな女を兄貴に取られるのが悔しくて、ただの嫉妬からだっただけ。

「どうしよう…どうしたら…」

修は悩んだ。

でも修は気付いていた。

自分が結局、美優の体より自分の事を心配していることを。

そして美優が自分なんかには惚れなくて柵孝雄に惚れた理由も解っていた。

修は床に座りこんで泣いた。

すると看護師達が集まってきた。

「あなた美優ちゃんに何を言っただんですか。」

看護師の問い詰めに修は涙を流しながら言った。

「俺は、どうしようもない、人を不幸にすることしか出来ない人間だから。」

修は泣き叫んだ。

心に溜め込んだこの17年間を吐き出すように。

「とりあえず話を聞きましょう。」

看護師はそういつと修の肩に手を置いたのだった。

その頃美優は孝雄と共に手術室にいた。

「出血の量から考えたら対した事なさそうだな。命に別状はないな、よかった。」

荒木のその発言に孝雄もほっとした。

しかし美優は頭を強くうっていた。

今のところ脳にダメージはないが、油断は出来ない状態だった。

もし脳に症状が見られ出したら後遺症が残るかもしれないし、下手したら死ぬ危険性もある。

手術が終わっても一週間位は集中治療室で様子を見る事になった。

三日後…

柊は美優の側にずっと付き添っていた。

この三日間特に症状の悪化もなく落ちついていた。

ドアが開きそこには荒木が立っていた。

「もうここまできたら美優ちゃん大丈夫だろう。何もなくてよかったよ。」

「迷惑かけたな。」

荒木は孝雄の言葉に笑顔を返すとその後、真剣な表情で話した。

「修君の事だけ少し話して良いか…」

荒木のその発言に孝雄を頷いた。

美優を心配している傍らで修の事をずっと不安に思っていたのだった。

た。

「修、なんて言ってた…」

柊の質問に荒木は話しだした。

美優が転落してから、修は看護師達に呼ばれて、別の部屋に集まっていた。

「美優ちゃんに何をしたの。」

看護師の一人が聞いた。

修は椅子に座り、俯いて振るえながら泣いていた。

そして小さな声で話しだした。

「高校でどんどん綺麗になっていく美優に俺は惚れたんです。…そして告白したらそれどころじゃないと断られました。」

でも…やっぱり好きで諦めきれなかった。

そして美優の後をつけるようになりました。

そしたら兄貴が倒れた美優を抱えてて、俺は兄貴にはこれ以上何も

取られなくなかったから、必死で…

美優の後をついたりして今日襲おうとしました。」

修はここまで言うつと泣きながら謝り続けた。

そして、

「俺はずつと苦しかったし辛かった。

俺より頭の良い兄貴には自由気ままにさせていて、俺には…

俺は医者になるほど頭良くないのに…

親父は俺に継がせようとするし。

兄貴の頭が羨しくて、親に何も言われない兄貴がずるくて…

兄貴を苦しめたかって気持ちがあった。

美優に…謝りたい。

俺は兄貴を苦しめるのに美優を使ったかっただけかもしれない…。

もう好きだったかも解らない……………」

荒木は柊に伝えた。

柊は俯いてただ頭を抱えていた。

そんな柊をみて荒木は伝えた。

「修が突き落とした訳ではないけど、襲おうとしたことは事実だから、警察が来る事になると思う。」

「ああ…そうだな。」

柊は顔を埋めたまま返事をした。

「そろそろ修に、話しても良いんじゃないか…。何も知らないままだったから苦しかったのもあるはずだ…」

荒木の言葉が心に響いた。

「今まで逃げてきてたんだ。そろそろ…言わなきゃな…」

柊はそういつと美優を見つめた。

美優はまだ目を醒ましそうになかった。

「まだ警察とか来てないんだよな…」

「ああ…、でももう少ししたら親父さんが来るぞ。」

「ならその前に会いに行くよ。」

柊はそういつと美優のでこにキスをして、部屋を後にした。

そして修の元へと歩きだした。

「修…」

修は膝を抱えてうずくまっていた。

柊の声で顔をあげた。

「兄貴…。何しに来たんだよ。よかったな、俺はこれから警察だし、もう美優の事も安心だろ。」

修言い終わると柊を見た。

しかし柊は黙って修を見つめていた。

「…っ。用がないなら帰ってくれよ。何しに来たんだよ。」

修が目には涙を溜めて言った。

「お前に話しがあつて来たんだよ。」

柊はそついうと近くの椅子に腰掛けた。

「修…俺達は実の兄弟じゃないんだよ。」

修は驚いて柊を見た。

そして柊は修を見ながら話しを続けた。

「俺は親父の友達の子供なんだ。

親父の友達は…俺の本当の親父は医者の中でも優秀だったらしい。親父は妬ましかつたんだろうな。

でもある日俺の本当の親父は末期の肝臓がんで倒れたらしいんだ。

その時俺はまだ三歳位かな、覚えてないだ。

その時に親父が俺を引き取らせて欲しいと言ったらいいんだ。

その時親父にはまだお前がいなかったし、自分の病院をいずれ継がせようと思っただけなんだ。

俺は次男だったから本当の親父も自分の病院は継がせられないから調度よかったんだろうな。」

そこまで言うとは一度呼吸を整え、再び話した。

「俺が物心ついた頃は今の親父はとても厳しかったよ。勉強勉強で毎日気が変になりそうだった。

で、お前が生まれてからはお前に力を入れ出した。

やっぱり実の息子に継がせたいし、

親父はお前には俺に勝ってほしいんだよ。

自分と同じ思いを持って欲しくないんだよ。」

言い終わると柊は修を見た。

修は泣いていた。

するとドアが開き、親父が入って来た。

親父が入って来たのを見ると修は泣きくずれた。

「孝雄、修に話したのか……」

「はい……」

「そうか」

父親はそーいうと修の傍に行った。

「お前とこうして向き合うのは久しぶりだな。
お前にはきつくあたりすぎたな、許してくれ。」

親父はそついうと修の頭に手をおいた。

「親父…ごめん。ごめん。」

修は親父に何度も泣きながら詫びていた。

柊は二人のその姿を見て、部屋を出た。

廊下を歩き、ベランダへと出た。

するとベランダは白い雪で覆われており、空からも白い雪が降っていた。

柊は親父と修の姿を見ていて本当の家族の温もりを感じていた。

柊もまた修が羨ましかった。

実の親の愛情をつける修が羨ましかった。

そして柊は早く自分の家族を作りたいかったのだ。

柊はぼうと外を眺めた。

そして腕に顔を埋めていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6522d/>

幸せを求めて

2010年10月12日01時26分発行